
魔法少女リリカルなのは 蘇った英雄

慧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 蘇った英雄

【Nコード】

N5623R

【作者名】

慧

【あらすじ】

この話は無印のリリカルなのはと、遊戯王5D'sのクロスです。

主人公である不動 遊星がリリカルの世界に行き基本は原作沿いで進みますが、読むに至って2つ、大事な注意があります。

それは、Z・ONEが本物の遊星であるという『設定』と、主人公がZ・ONEであった遊星である事です。

わかりやすく言うと、Fateのアーチャーが士郎になってリリカ
ルの世界に行くのと同じなわけです。

不動 遊星がZ・ONEなんて嫌だ！や、Z・ONEはZ・ONE
が良い！という方は申し訳ありませんが、不快感を受けるだけなの
で、読まない方がいいです。

宜しく願います。

1話 彼の願い（前書き）

1話と言うより、プロローグやエピローグに近いかもしれませんね。

視点は三人称、一人称、三人称となっています。

では…。

1話 彼の願い

彼はとても優しい人でした。

顔は常に無表情で口数が少ない人でしたが、誰よりも心に敏感で温かくて……強かった。

周期に行われる、星の行く末を巡る戦いで彼は、すれ違っただけの仲間達の心を開き、遂には邪悪な神を打ち負かしました。

星の平和を守った彼はその後も戦い続け、何時しか周りには多くの人が集まり、彼の事をこう言いました。

英雄、と……。

二百年後

世界は滅びました。

生き残ったのは、彼一人。

何故、世界は滅んでしまったのでしょうか。

何故、彼だけが生き残ったのでしょうか。

常人の倍を遥かに上回る歳月を生きていき、大切な者を奪われた彼に与えられたのは、絶望だけでした。

やがて全てを奪われ、悲しみに暮れる。

寂しさを埋める為に、愛していた彼女にそっくりな人形を生み出したりしました。

彼が最後の一人になる前、僅かに生き残っていた3人の内、彼と特別親しかった友人は、昔に比べ変わり果てたそんな彼を見て恐怖を覚えました。

早く彼を助けなければ、狂気に支配されてしまう…！

誰か救って欲しい！

結果、友の願い虚しく、彼は神という名の悪魔になりました。

静かなる狂気に支配され…。

時戒を司る生命の樹と契約をし、神如き力を手に入れた彼は、世界が滅ぶ技術を作り出した父と母を両親自身の部下に殺させ、技術を抹消しようとしています。

それにより大地は割れ、過去は変わり、かつての彼の仲間も孤児となり、彼自身の過去も孤児となりました。

しかし…。

それでも未来が変わる事はありませんでした。

遂に業を煮やした彼は、自分が今まで守ってきた街そのものを消し去る事を決めるのです。

全てが順調、そう思っていた矢先、最後に立ちふさがったのが…彼自身、過去が変わった事により生まれたもう一人の不動 遊星でした。

「…シューティング・ソニイイック！」

「…グアアアアアッ!？」

星屑竜の息吹が究極自戒神を飲み込み、私を吹き飛ばす。

馬鹿な…私が…負ける、だと…!？

自らを隠した仮面は完全に碎け散り、廃墟の世界に叩きつけられ、強固な装甲で出来ている殻は破壊された。

重い。

なんて重い一撃なんだ。

不動 遊星だけの思いではない、彼等や彼女達、街に住む人々……
いや、世界中の人達の思いが乗せられている。

私を止めるには充分すぎる程の……。

結局私のした事は、只悪戯に人の命奪い、傷つけてしまう事。
人の可能性を信じず、逃げてばかり……間違えた存在だった。

これならば不動 遊星が私を否定したくなるのも無理は無い。

フツツ……そしてシェリーが見た不動 遊星が死ぬという未来は……私
が死ぬという意味になった。

皮肉な物だ、自分に殺されるというのは。

地面に倒れ伏しながら感情を何処か投げやりに行っている私に駆け寄
ってきた少数の人影……チーム5D's。

「しっかりしてZ・ONE!」

「大丈夫、Z・ONE!？」

何、を……言っているのです？

真っ先に話しかけたのは、双子の兄妹。

優しい目と言葉は昔に向けられていた物と全く同じで、そんな事を
出来るアナタ達が信じられなかった。

「安心しろZ・ONE!この俺がいるのだからな!」

「こんぐらいの傷、俺達がすぐに治してやるぜ！」

私はアナタ達の遊星ではないのですよ？

かつての気難しい好敵手、自分に素直な友よ、昔から怪我ばかりするアナタ達がそんな事言わないで下さい…。

その『やり取り』が私には懐かしすぎて、涙が止まらないのです…。

「友よ、今度は私が君を治す番だ…」

「いつだって君は、怪我ばかりするね…」

アポリアもアンチノミーも、私はアナタ達をコピーと呼んで、人形扱いしたのですよ？

特にアンチノミーは不動　遊星と共に消し去るつもりでしたのに…。

何故『本物』みたいな笑顔を向ける…？

「Z・ONE…いえ、遊星…アナタの死ぬ未来を私が変わえてあげるわ、絶対に」

シエリーも何故です。

アナタの両親を殺したのも私なのに、アナタはそんな目で見てくれるのですか…。

アナタを手放したくない一心で、仲間へ引き入れるという鎖で繋い

だというのに…。

「遊星…大丈夫？」

十六夜 アキ…。

「しょうがない人ね…」

苦笑を交えながら近寄ってくる、ああ…なんと温かいこの感覚…。

私が欲しくて堪らなかった物…。

「…私は、ずっと孤独だった…。」

血まみれの姿で亡霊のような世界をさまよっていた、あの絶望は、
今でも忘れない。

「……………」

無言で近づいてくる不動 遊星。

身なりはボロボロ、今の私と全く同じ。

だが…目は違う。

生きている目、希望を持ち続けている目だ。

「…不動 遊星…私は間違えていました。所詮人々の意志を無視し
た先に、未来など無かったのです…」

例えモーメントを抹消しても人々に『悪』と言う意志がある限り、

世界はいずれ『破滅』へと向かう。

大切なのは、『悪』とどう向き合うか…。

孤独感に耐えきれ無かった私は、そんな事をどうでも良いと考え、目先にある幸せだけを掴み取るうとした。

この世は完璧では無い、人間は完璧では無い、支えて貰わなければならぬのだ…誰かに。

その為に絆は、何よりも『悪』に向き合う支えとなる。間違えても正してくれる絆が…。

私の行ってきた事はそれら破壊する事、人々の絆を破壊してしまうところだった。

「…俺には、人々の意志という物が漠然としすぎて、まだよくわからない。本当にお前の考えは間違えていたのか、その行いによる善と悪の境目がな…」

境目ですか…。

「…そうですね、確かに難しい。私にも正義と悪の違いなどわかりはしません」

本当に難しすぎる真理だ…。

「…だが」

不動 遊星が私に顔を近づけて、真っ直ぐと目を見つめる。

「…今ならわかる、お前の存在は間違っていないかったと」

「あなたが私の存在を認めた…？」

何故、あれほどまでに拒絶したというのに…。

「…お前の存在は世界中の人々に未来について考えさせてくれた、絆の大切さも…」

なるほど、英雄の踏み台というわけですね…。

これは愉快な話し、自分に踏み台にされるとは、私に相応しい最後だ…。

「…そして、俺はみんながいないと駄目な人間だな」

…！？

彼のこの言葉は私を驚かせる、同時に、嬉しくて嬉しくて堪らなかった。

…フフフ、そういう事ですか。

「あなたはアナタ自身の『悪』を知り、戒めとしたのですね…。」

狂気に支配された時に気づいた私と違い、正気で気づいた自身の悪。

その時点で彼が私と同じ末路を辿る事は無くなった、最高かつ、素晴らしい結果だ。

人生の最後に未来の輝きを感じる、その象徴であるアナタなら、不

動 遊星なら本当に未来を変えられる…。

ならば私が彼に伝える事はこれで最後。

「…いいです、か…不動 遊星？ 何が何でも…みんなを守り

通しなさい、アナタは私を…超えたのですから グフッ！」

口から吹き出す真っ赤な血。

デュエルのダメージが実際の物となっているため、衝撃により邪魔
でしか無かった生命維持装置が破壊されてしまっている。

沈むような死の感覚。

遂にこの時が来たようだ…。

『遊星！遊星！遊星！遊星！』

…聞こえる。

人々の思いが一つになっている声が…。

未来を変えようとする人々の思いが…。

戦い続ける彼の背を押し、支えている…。

これならばもう、私が心配する事は何も無い。

「遊…！？…星！」

違うぞ、アキ…。

俺は君の遊星では無い…。

私はZ・ONEだ…。

だから泣かないでくれ…。

そして俺は祈っている、君達の未来を…。

薄れゆく意識、体から力が抜けていく…。

これで安らかに逝ける…。

彼女達の下に、私を愛した彼女達の下に……。

だがせめて、こんなに狂ってしまった自分ではなく、彼女達が愛してくれた不動　遊星のまま逝きたかった…。

そうすればきっと、向こうの世界にいる彼女達から嫌われたりする事は無いだろうから…。

俺は手を空に伸ばし、強く願った…。

不動　遊星になりたいと…。

…ジャック、アキ、クロウ、龍可、龍亞、鬼柳、シエリー、カーリ
ー、牛尾、御影さん、パラドックス。

…今、私もそつちへ逝きます。

これで やっ、と……。

彼はとても優しい人でした。

顔は常に無表情で口数が少ない人でしたが、誰よりも心に敏感で温かくて 強かった。

絶望という名の未来を生きていき、幸せを求める為に自分を捨ててまで戦い続け……。

死を望んだりもしました。

そんな彼が最後に願ったのは、自分に戻る事……。

自分を支えてくれたみんなの為に、みんなが望む自分になりたいのです。

だけどそれは、間違いであると言えるでしょう。

自分は自分、彼は彼なのです。

誰かになりたいと思った瞬間で間違いのです。

故に彼は自分にしかたれない、彼はどんなに変わろうと過去も未来

も現在も既に不動 遊星という存在……。

その真実に彼が気付いた時、果たして今度は
どのような願いを
するのでしょう。

1話 彼の願い（後書き）

此処まで読んで頂き、有難うございます。

読者の方の中には、何故不動 遊星をZ・ONEとしているのか…と疑問に思うでしょうね。

理由は様々ですが、特にその中でも…。

- 1、単純にZ・ONE＝遊星が好きだから。
- 2、一度は絶望してZ・ONEになったとしても、再び不動 遊星として希望を持ち、絶望から這い上がる遊星を書きたかった。

…が、大きな理由です。

これからも不快にさせる事があるかもしれませんが、宜しくお願ひします。

2話 蘇った英雄（前書き）

割と早く更新出来ました。が、実は1話と2話は前々から書いていた
ので、早いのです…。

実際はかなり更新が遅いので、イライラさせると思います。

すみません…。

2話 蘇った英雄

眩しい光が自分を包み込む。

何かに押し込められ、その後まるで、達磨に手足を無理やり縫い付けられるような感覚だった。

辺りは夕陽が沈みかけ、空が真っ赤になるなか、小さい神社から零れる眩い一つの光。

周りに人の気配は無く、誰もその光に、力に気づかなかった。

徐々に光が失われていく、いつの間にか其処には一人の青年が俯せで倒れていた。

「…此処はあの世か」

もしくはこれを天国と呼ぶのか地獄と呼ぶのか。

どちらにしても、目に映る物が随分現実的な世界としか思わざるえなく、おかしい物だった。

そして青年はまるで、自らの腕と脚が無いような不自然な動きをする。

芋虫のように、顔を地面にこすりつけて…。

「…?」

数メートル進むと、青年は自分の不自然がおかしい事に気づいた。

「…腕が、ある」

細い指。

しなやかな筋肉を宿す右腕を見て、虚ろに口から疑問が零れる。

そして同時に、左脚もある事に気づくと、生まれたばかりの子馬のように慣れない様子で立ち上がった。

フラフラと少しずつ歩数を増やしていくと、神社に備え付けられている公衆トイレに駆け込んだ。

鏡に映し出される自分の顔。

「…こ、こんな事が…！」

若々しい顔が驚愕に歪む。

これは夢では無いかと自分の顔を両手でひたすら触り、感触を確かめた。

何故なら青年は、其処らに居る老人さえも上回る程長い年月を生きていたのだから。

人類の生き残りが自分一人になるまで…。

同刻。

「この感じ…！発動した！」

死んだ世界のように静寂な森の中を一人の少年が歩いていた。

額に汗を滲ませながら口から零れる言葉は焦り。

危険な悪が迫っている事に気づいた。

辺りを見渡せば、黒いモヤモヤした思念体がもうすぐ近くまで自分に接近している。

「妙なる響き光となれ！赦されざる者を封印の輪に！」

自分に与えられた使命を全うする為に少年は必死に詠唱を行う、誰かが傷つく前に全てを終わらせるんだ、と…。

思念体は無情にも猪突猛進に突っ込んでくる。

少年が掲げた赤い宝玉、レイジング・ハートが輝き魔法陣を展開。

「ジュエルシード、封印！」

『グオオオオオオ！？』

魔法陣と思念体がぶつかり合い、激しい音が森に響く。

思念体から絶叫がほとばしり、自らの肉と血が飛び散った。

このままではマズい、消されてしまう。

恐怖感を感じた思念体はズルズルと体を引きずり、逃亡を始める。

「ま、待て！……ぐう！？」

少年もだった。

思念体と同じように衝突で多大なダメージを受け、傷だらけの姿に変わり果てている。

「……………」

途端に森の中が静寂に包まれた。

傷だらけ少年も凶悪な思念体もいなくなり、其処には……一匹のフエレットしか残っていないかった。

遊星 side

ビルの屋上から見下ろし、此処は素晴らしい街だと私は素直に思った。

都会ながらも美しい景色、空気が汚染されておらず、風塵などのハウスタストが一切感じられない。

公共の場に緑が生い茂り、人と自然が共存している。

私が何故、昔の姿になったのかはまだわからないが、こんなに素晴らしい物を見る事でそんな疑問は吹き飛ぶようだ。

唯一残念な事は、この場所が未来が変わった世界ではない事か…。

地形を見てすぐにピンときたが、書店に入り、地図を見て確信に変わった。

此処は私の世界ではない。

異世界という物が本当に存在している事には心底驚かされたが、納得もしている。

精霊の世界があるのだ、デュエルという概念が無い世界があるのも当然だった。

問題は……これからどうするか。

金銭も無ければ、デュエルディスクも無い上にDホイールもカードも無い。

…まあ、当然と言えば当然ですか。

右腕の袖を捲る、其処には何も描かれていない。

ましてや竜の痣など…無い方が助かる。

せつかく自械神との契約で呪いにも似た不老を無くしたというのに、それまで蘇ってしまえば、また死ぬ事が出来なくなってしまう。

しかし、どうして私は再び不動 遊星になれたのでしょうか。

彼等の本当に諦めない気持ちが出来を変えたから？

それとも何者かがアポリアやアンチノミーやパラドックスのように、私にそっくりなコピー人形を生み出し人格を植え付けた？

有り得ない。

あの技術は私が直々に生み出した、不完全な死者蘇生法。

他に知る者は既に亡くなっているオリジナルのアポリアやアンチノミーとパラドックスぐらい…。

いや、もし私がコピーとして生み出した彼等が本物の…オリジナルの存在なら…。

思い出させるのは彼等の『本物』のような笑顔。

肉体は偽りだとしても『魂』は『本物』では無かったのか？

不完全な死者蘇生では無く、本当に彼等は生き返った？

まさか…。

私は神ではない、大切な人一人すら救えないただの人間…。

そんな事は有り得ないのです。

やはり此処は…私が願ったからか。

神か悪魔か知りませんが、もしこれが当たりならば酔狂としか言いようがない。

私のような死んで当然の存在をわざわざ生き返らせるのですから…。

気付けば空は、すっかりと黒に変わっている。

今夜の野宿出来る場所を探さないといけない。

思考をZ・ONEとしての自分から、出来る限り不動 遊星に近づけて切り替える。

そろそろ、行くとするか…。

騒がしい街中で一人の少女が慣れた手付きで車椅子を操る。

歩道には生気が抜けたサラリーマンや、異色の髪をした若者、数多くの人がごった返しており、少女はその隙間をぶつからないようにスルスルとすり抜けていた。

膝には中身が詰まった重い物袋が載せられている。

「…ッ」

慣れているとは言え、かなりの集中力が無ければならない、人にぶつけどもしたら大変だ。

だがそんな少女に対し、誰も気にとめようとしない、避けようともしない。

軽く汗を掻き、自分の身近に迫る危険を自分で避ける。

しかし…。

「熱…！」

「気をつける！ガキ！」

柄の悪い男の歩きタバコが少女の頬に当たる。

誰も見て見ぬふり、自分達とは関係ないと通り過ぎていく。

少女は痛さと寂しさに涙が溢れそうだった。

「チッ」

男が舌打ちをし、立ち去ろうとしたその時……。

「……オイ」

無機質の音が止める。

「ああ？」

振り返ると其処には、無表情ながらも強い意志を宿す目をした青年が、凄まじい怒気を放ちながら立っていた。

遊星 side

「……謝れ」

「何イ？」

男はまるで、俺の言葉の意味を理解していないような態度を取る。

コイツは頭が馬鹿だけで無く、耳も悪いようだな。

「……聞こえなかったのか、この子に謝れと言ってる」

「んな事このガキが避けなかったのが悪いんだろが！」

「……」

馬鹿は俺だったか…。

これ以上は無駄と判断し、男から少女に向き合う。

「大丈夫か」

目線を合わせ、安心させる為に精一杯の笑顔を向ける。

「は、はい…」

念の為、少女の火傷の状態を確認する為にグローブを外して肌を触る。

少女の口から「あ…」と言葉が出た、痛かったかもしれない。

少し……赤いが、酷くは無い。

「おいテメエ！好き勝手言っていきなり無視するんじゃないよ！」

男は俺の態度に腹が立つたらしい、後ろから今にも掴み掛かって来そうな気配がした。

「あぶない!？」

少女が叫び声を上げる。

俺はそのまま振り向きざまのハイキックを叩き込んだ。

「グフウ!？」

爪先に硬い骨の感触が伝わる。
どうやら鳩尾辺りに直撃したのか、男は悶絶するとそのまま気絶した。

やりすぎたな…。

若い頃の肉体というのは少々厄介だ。
想像以上に軽い動きをする。

「お兄さん、強いなあ」

ふわふわと優しい関西弁の言葉が俺に語りかける。

少女としても、まさか俺が一撃で倒すとは思ってなかったようで、目をキラキラと輝かせながら話しかけてきた。

「…当たり前が良かっただけだ」

「えへへ、私の目は誤魔化されへんで。お兄さんのあの身のこなし……映画で見たのと同じや」

さっきまでと随分雰囲気が違うな…。

恐らく此方が明るい時の少女なのだろう、やはり幼い子いうものは、どの世界でも愛らしいものだ…。

「居たぞ！彼処だ！」

人ごみの向こうから役人と思われる制服を着た、若い男達がやってきた。

誰かが通報したらしい、少女に関しては無関心だったくせに、余計な事をする人だけは居るものだな。

「あ、お巡りさん！このお兄さんが私を助け」

「一緒に来てもらおうかな！」

フツ、こんな場所ではゆっくり話しても聞かないのか、若い者は急かすからよくないな…。

「ちょ、ちょっと待ってな！お兄さんは…！」

「もう大丈夫だからね」

「ち、違う…！」

「よしよし」

マズい…。

仮に少女が弁解し、俺自体に罪は無いと知ってもらったとしても今の俺には身分を証明する物は無い。

最悪、不法入国扱いで牢屋行き。

若い頃に味わった臭い飯などもう懲り懲りだ。

今、役人達は激昂する少女に注意がいつてる。

俺は躊躇いなく、走りだした…。

「ま、待て！」

「あ…いかないで、お兄さん！」

逃げ足には自信がある。

人波を最小限の動きで避け、後ろを見ると既に男達の姿は見えなくなっていた。

じゃあな…。

はやてside

「アホオーーーーー！」

「ご、ごめんね。お嬢ちゃん…」

車椅子の可愛らしくて大人しそうな少女が複数のお巡りを説教する、異様な状況だった。

少女の説教は止まらない。

やれこれだから最近の若い者はと、やれこれだから最近の警察は使えない等、なかなか耳の痛い所をおばちゃんのように、突く。

男達のペコペコと頭を下げ、最早威厳は零であった…。

「おかげでお兄さんにお礼を言えなかったやないかあ！」

少し派手な格好をしていたけど、凄く優しくて温かい人やった。

今どき珍しい。

あれやな、いわゆるギャップと言っのかな？

派手な格好をしていて周りから誤解されやすいけど、本当は其処ら辺の真面目よりしっかりしていて優しい性格？

特にほつぺた触った時の指なんか凄く細くて綺麗で……女爪でゴツゴツしてて…。

逆にこっちが照れてしまった…。

そして同時に思い出させるのは、私を安心させようと微笑んでくれた優しい笑顔。

少し、顔が熱くなるのを感じた…。

今度会ったら、ちゃんと名前を聞いてお礼しなきゃな…。

「お兄さん…」

「…ハア、ハア！」

焦土の匂いが立ち込めている廃墟の世界、地上には逃げ惑う人々、空には巨大な機械兵士が浮かんでおり、無慈悲な殺戮を行っている。

俺はその中を、レールガンが装備されたDホイールで走り抜けていた。

早く…早く！

早くしなければ仲間が殺される！早く動け！一秒でも早く！

「…ウオオオオオオオオ！」

叫び、レールガンを連射する。

次々と機械兵士を破壊していき、助けを待っている仲間へ走る。

既に攻撃の爪跡が残されているビルへたどり着き、乗り捨てるような勢いでDホイールから降りた。

「…アキイー！龍可アー！」

瓦礫にまみれた室内、最悪の結果が脳裏を掠め、不安になる。

「……………」

返事が…ない…！

「…アキイイイイイイ！」

頼む…！

「…龍可アアアアアア！」

生きていてくれ！

「「遊星！」」

彼女達の声が聞こえる…。

振り向くと、若い頃に比べてスツカリと髪が伸びた美しい美女が二人いた。

「…良かった…！」

胸から安心が溢れ、強く抱きしめる。

「ゆ、遊星…」

「痛いよ…」

彼女達は赤くなりながらも文句を言うが、その体を俺に任せていた。

「…帰ろう、みんなが待っている。俺達の…新しい家に」

「「うん…」」

遊星 side

不意に眩しい感覚がした。

小鳥のさえずりも聞こえ、今が朝だと伝えてくれる。

夢か…。

あの頃は毎日、命の危険に晒されていたというのに私は幸せだった。

愛してる彼女達を大切な彼等と共に守り、どんな危機的状況にも乗り越え、いつかは、やがていつかは未来があると…。

…しかし。

脳裏に映るのは、大量の屍。

絶望の未来…。

「…いや、これはもう終わった話しか…」

此処は異世界、私の問題を持ち込む事でもない上に、今元の世界に帰るとしても、居場所が無い。

俺はちゃんという。

そして彼女達は彼女達でも私の愛した彼女達ではない。

だから今、私のやるべき事は…。

「…不動 遊星に戻る事」

絆を大切にし、希望を信じ、どんな時も諦めない、目の前に友が立ちふさがっても真っ直ぐと向き合う、本物の英雄。

取り戻す。

彼女達が愛してくれた自分を…。

そうすれば、私は……。

立ち上がり、夜風を凌いでいたトンネルから出る。

今日は良い天気だ…。

何か良い事があるかも知れない…。

2話 蘇った英雄（後書き）

ユーノ君が出オチとか言っちゃやーよ。

遊星がブルーノやアポリアの事をコピーと言ってますが、心の奥底では本物ではないかと感じています。

何故なら1話の死ぬ瞬間、パラドックスの名前は読んだのに、無意識にアンチノミーとアポリアの名前だけは読んでいないからです。

死んでいないからあの世には、いないという事。

因みに自分は、原作でもアポリア達はコピーでは無く本物だと思います。

じゃなきゃ、Z・ONEの事を友なんて言わないよね！

（
）

そして遊星が言っていた、自械神との契約…。

オリジナル設定なので、後々説明します。

あと自分は、はやてが1番好きです。

なので1番にフラグを建てました！

…アレ、という事は（ry……。

3話 遊星歯車（前書き）

今回も寄り道な話です。

アニメ1話の半分くらい？

表現とか雑な気がしてなりません…。

文才欲しいよお！

3話 遊星齒車

この世には、様々な世界があつて…。
その世界には、幾千、幾万の、色んな想いを持った人達が居て…。
その想いは、触れ合つて、ぶつかり合つて、苦しい事がいっぱいある…。

だけど、その中のいくつかは、きつとつながつていける、伝え合つていける、それはとても大切な事。

私は、違う世界から来たあの子とあの人と出逢つて、それを知つたんだ…。

綺麗な目をしているのに、どこか寂しげなあの子は、ぶつかり合いと苦しさを教えてくれて…。

そして、あの子と同じように寂しそうなあの方は、それによつて生まれる繋がり… 『絆』の大切さを教えてくれた…。

これから始まる物語は、そんな私と、あの子と、あの人のお話。

魔法少女 リリカルなのは 始まります！

「行つてきまーす！」

暖かな日差しが照らす住宅街に、明るい少女の音が響き渡る。

少女はタツタと軽快な足音を鳴らしながら走り、通学のバス停まで足を進めていた。

「…ん？」

「うわぁ！？」

曲がり角に差し掛かった時、いきなり目の前に細身の青年と出会い頭してしまい、ぶつかってしまふ。

少女は衝撃で尻餅をついたが、やはり体格の差か、青年はビクともしずに直立したままだ。

「あう…」

うう、お尻が痛い…。

「…大丈夫か」

何時までも立ち上がらない私が気になったのか、お兄さんが私に対して左手を差し出し、立ち上がるのを手伝おうとした。

「う、うめんなさい…」

やっちゃったなあ…。

出会い頭とはいえ私の不注意だったし、相手に嫌な思いをさせてしまった…。

私の謝罪にお兄さんは、むしろ自分が悪いといった表情をし…。「…俺もさつきまで考え事をしていたんだ、君だけのせいじゃない」と此方を安心させるような事を言ってくれる。

良かったあ…お兄さんってちょっと恐い雰囲気だったから、悪い人かと思っただ…。

心の中だけでそう呟き、お兄さんの手に捕まるうとした時、少し違和感を覚える。

「あ…」

違和感の正体、其れはお兄さんが差し出した手が左手だった為に、私の右手が捕まり難かった事だった。

「……………」

お兄さんはそのまま無言で差し出した手を、左手から右手に変えて私に合わせてくれる。

普通ならお兄さんは左利きだったんだなど、思っただけだけど、何か変な感じがした。

其れは、お兄さんが一瞬、本当に一瞬だけ自分の右手を見て、何だか寂しそうな顔をしていたから。

「あの…」

「…なんだ」

「どう、したんですか？」

私の質問にお兄さんは無表情から少し目を見開くと、取り繕ったように笑顔を向けてくれた。

「…自分が右利きだった事を思い出したのさ」

自身の右手を見ながら意味深な事を語るお兄さん。
幼い私には、まるで意味が分からなかった。

「え？」

それってどういう意味…？

「…学校に遅刻しないようにしろよ、じゃあな」

質問には答えたと言わんばかりに、足早でこの場を去ろうとする。
お兄さんが私の横を歩いた瞬間　キーンという、耳なりのような物が聞こえた。

何、この感じ…。

後ろを振り向いた時には既にお兄さんいなくて、代わりにお兄さん

とぶつかったところには、小さな機械の部品が落ちていた。

「なんだろう、これ……」

拾ってマジマジと見ると、複数のとても小さな歯車が合わさって、一つの大きな歯車と合体しているように見えた。

もしこれがお兄さんのなら困るよね……。

急いで私は、お兄さんが消えて行った方に向かう。

しかし、やっぱり何処にも姿は見当たらず、周りには私と同じようにバス通学する生徒達が走っているのが見えた。

いけない、遅れちゃう！

でも、これ……どうしよう。

置いておくわけにもいかないし……こうなったらしょうがない。

私は手に持っている機械の部品を鞆に突っ込み、走る。

あのお兄さんも落としたと気づけば此処に来るよね、そしたら下校の時に渡せば良いや！

遊星 side

「……しまったな」

肩にプロテクター付きの青いジャケットを羽織った青年が、困った表情でゴミ捨て場を漁っていた。

心当たりは今朝の出来事。

あの時だろうな、部品を落としたのは…。

早朝に起きてから直ぐに、多くの廃車が捨てられているところへ忍び込んで、手に入れたジャンクパーツから作り出した物だった…。

アレが無いと大きなトルクが伝達できること出来ない。

クランク軸は探せば幾らでもあるが、其れじゃ駄目だ…。

「…戻るしかないな」

「……………」

無い。

優しい春風が吹くなか、今度はポカンとした表情で青年が道に立ち尽くしていた。

ゴミ一つ落ちていない、綺麗に整備されているこの道路が、今は憎らしくて堪らないとは…。

「…仕方ない」

アレが無いと何も出来ないの、暇を潰すしかない。

散歩でもしながら資金源に地金を拾って行きましょう。

なのはside

「「「いただきます！」「」」

昼休み、何時ものように屋上でアリサちゃんとすずかちゃんと一緒に弁当を食べる私。

お喋りは今日の授業で出てきた、将来の夢に関する事。

だけど私はまだ、何をしたいのか、何が出来るのか分からない為、悩んでいる最中なわけです…。

「なのはは、理数系が私とすずかより上じゃない！」

生意気だぞ、羨ましいぞ、このこの…と言いながら卵焼きで顔をつつくアリサちゃん。

食べ物で遊んじゃ駄目だよ…。

確かに私は、アリサちゃんとすずかちゃんより上だけど、文系はアリサちゃんの方が上だし、すずかちゃんは工学系が凄いから大して変わらないと思うんだけど…。

あ、そうだ…。

「すずかちゃん、これ何か分かる?」

靴から今朝お兄さんが落とした機械の部品を取り出して見せる。

機械が好きなすずかちゃんなら、何の部品が分かると思うから…。

「ああ…これはね…」

流石すずかちゃん、一目見て分かったらしく部品を私の手から取ると、こう言った。

「遊星歯車って言うんだよ」

「ゆうせい…はぐるま?」

「この歯車の並び方が太陽系に似ているでしょ?」

「うん」

確かに、中央の歯車が太陽で、周りの歯車が地球や火星みたいにグルグル回る…。

「遊星は、惑星の古い表記だから其処から由来しているの」

「へえ」

感心と同時に面白いと思う。

知りたい事を聞けたので、すずかちゃんから遊星歯車を取ろうとし

た時、其れまでジツと見ていたすずかちゃんが、急に驚いた顔をした。

「どうしたの？」

「お、教えてなのはちゃん！これ何処で手に入れたの!？」

「ふえ!？」

普段大人しいすずかちゃんが一変。
興奮した状態で私に詰め寄ってきた。

手に入れたと言っても、拾った物だし…。

落としたと思うあのお兄さんも、なんか不思議な人だったから…。
話せば長くなるよね…。

「え…つとお、実は今朝ね」

「なんか、ラブコメ定番とシンデレラが合体したような話しね…」

「にゃ!？」

私の話しが終わってアリサちゃんが一言、とんでもない事を言い出すので、思わず猫語で叫んでしまう。

ラブコメ定番とシンデレラが合体したって、どういう事…。

「だって少女漫画の始めに、遅刻しそうな女の子がパンを加えて走

っていたら、曲がり角でぶつかってしまったのってあるじゃない？」「
て、定番すぎるよ…。」

「どちらかと言うと私が遅刻しそうになったのは、お兄さんとぶつ
かった後なんだけど…。」

「気にしない、気にしない！あ、あとシンデレラは、相手の名前が
分からないという事と、部品を落としたから！」

その役は私じゃなくて、お兄さんなんだ…。

「…で、どうしてすずかは其れを知りたかったの？」

ひとしきりアリサちゃんは私をイジメるのを止めて、すずかちゃん
に向く。

すずかちゃん本人は、相変わらずウキウキとした雰囲気を出しながら
らニコニコしている。

「この遊星歯車ね、ギアの比率を揃えるのに手作業でやっているん
だよ！凄いよね！」

「は？」

「へ？」

ギアの…比率？

意味を理解出来ず、ポカンとした私達にすずかちゃんは気づき、わ
かりやすく説明してくれた。

「えつとね、さつき気づいたんだけど…この遊星歯車は工場で作られた物じゃなくて、手作業で作られた事が分かったの」

「な、なんでそんな事が分かるの…？なんか、凄いや博識を通り越しているような…」

「ううん、凄くないよ。よく見れば遊星歯車の歯車全てが違うメーカーで作られている事が分かったんだ」

ほら見てと、すずかちゃんが指差した所を見たら…確かに。大手の会社や聞いた事すら無い、小さな会社名が掘られている。

「同じ部品でも会社によってそれぞれのギアの大きさがちよつとだけ違う時があるから、下手に自分で歯車を作ろうとすると噛み合わない事があるの。そしてこの遊星歯車は其中でも、一寸の狂いが許されない繊細な歯車。なのはちゃんが出会ったお兄さんはそれを完璧に成功させて、しかもマイクロ単位は手作業で削っているの」

マ、マイクロ単位!?

「確かそんな事が出来るのって、熟練のお爺さんじゃないの?」

アリスちゃんの言う通り、テレビで見た事がある。

長年の経験と感覚だからこそ、機械を超える正確さで物作りをする職人さん。

でも…。

「お兄さんは、まだ二十歳にもなっていない感じだったよ」

「じゃあ、誰かに貰ったとか？」

それも有り得そうだね。

「でも私…会ってみたいな」

「ええ!？」

「見てみたいの、こんなに凄い技術を持っている人を」

両手を力強く握り締めながらムンツと、鼻息荒く発言。

私はいつもとまるで違うすずかちゃんにたじろぎながらも…。

「でも名前も知らない人だし、そもそもお兄さんの物じゃない可能性も…」

「お願い」

うう…。

やっぱり大切な友達の真剣なお願い、断ろうとしたけど、無理でした…。

学校が終わった帰り道、すずかちゃんとアリサちゃんと一緒にお兄さんを探す事にした私。

ただど途中で、私は何かに「助けて…」と言う声を聞き、二人を置いて、駆け出してしまった。

不思議な声だけを頼りに鬱蒼とした森の中を走ると、其処には小さなフェレットが傷だらけの姿で寝ていたのです。

「可愛いフェレットだったね」

「うん、でもゴメンね…すずかちゃん。お兄さんを探す時間が無くなっちゃった…」

もうすっかり外は夕陽が沈みかけていて、早く帰らないとお兄ちゃんに怒られてしまう…。

「ううん、良いの。あの時なのはちゃんがフェレットを見つけてあげなくちゃ、大変な事になってたわけだし…」

「そうそう！シンデレラを見つける時間なんて、幾らでもあるわよ！」

すずかちゃんは優しい笑顔を浮かべて、私の事をすぐに許してくれて。

アリサちゃんは冗談を交えながら、私を少しでも安心させてくれる言葉を言ってくれた。

「ありがとう」

すずか side

窓から流れる景色。

美しい夕陽に照らされる世界は街を外れ、今、自分が家に向かって
いる途中であると、改めて認識する。

「お嬢様、何か良い事でもありましたか？」

黒い高級車を運転してくれるドライバーが、ミラー越しに私を見つ
める。

どうやら無意識に微笑んでいたらしい、其処まで景色を見ていた窓
を鏡代わりに覗き込み、自分の笑顔が移っていた。

そう、確かに今日は良い事があった。

友達から聞いたお兄さんの話しには、普段大人しい筈の私をワクワク
クさせてくれる力がある。

だけど只単にお兄さん自身では無く、友達と何かを一緒に目的を目
指している事がワクワクさせてくれるのだ。

今ではスツカリ仲良しの三人組だけど、昔はこうじゃ無かった。

弱虫の私はアリサちゃんにイジメられて、なのはちゃんはアリサち
ゃんを叩いて、遂には喧嘩まで…。

だから明日は楽しみ。

見つけるのに焦る必要は無い。

ゆっくり、ゆっくりと。

何気ない会話をしながら幸せな毎日を送る。

そう、胸の中で考えていた時…。

…ふと、不思議な人影を見つけた。

「お願い、止めて」

「ハイ」

私の突然のお願いにも関わらず、運転手さんは快く答えてくれた。

急いで車から飛び降り、走る。

たどり着いた場所は、壊れた家電や車がチラホラと山のように積み上げられているゴミ捨て場。

その中で一つ、一瞬だけ見てしまえばゴミと間違えるくらい溶け込んでいる、髪を逆立たせた青年が一番大きな山に座り込んでいた。

夕陽が沈み、仄かな明るさしか残されていない周りな上に、顔は伏せられ、表情が全く見えない。

私はその景色を一言で喻えられるだろう。

…積み上げられた死体に座り込む青年と。

其処だけはまるで別の世界だ。

壮絶ながら、悲観さを醸し出し、見ている私は胸が締めつけられる

「…誰ですか」

お兄さんが私に気づき、機械のような顔で見つめてきた。

こんな雰囲気を持つ人、今まで見た事が無い。

「私は、月村すずかと申します。アナタは…？」

「…私は…Z・O」

座り込んだまま、私に名前を語ろうとしたお兄さん。

だけ…。

「…危ない！」

え？

機械的な無表情が一変。

お兄さんは目を見開き、必死な形相で叫んだ。

私に影が覆い被さる。

右を見れば、山のように積み上げられていたゴミが私に迫っていた。

「あ……！」

助けを呼ぶ余裕なんてあるわけが無い。

ゴミの中には冷蔵庫だってある。

このまま押しつぶされれば、只では済まないだろう。

僅かな瞬間で覚悟を決めた……。

大きな物音が辺りに響く。

「?……」

痛く、ない？

それどころか何かに優しく抱きしめられているような感覚さえもするでは無いか。

閉じられていた目を少しずつ開けていくと、すぐ目の前にお兄さんの端正な顔が目の前にあった。

「……大丈夫か？」

先ほどまでの丁寧語ではなく、どこか親しみを感じさせる言葉使用で私に声をかける。

表情も機械的なものではなく、必死な形相でもなく、優しく、温

かなものにならなっていた。

お兄さんの後ろを覗き込むと、其処にはさっきまで私がいた場所にグシャリと潰れた機械が…。

背筋が寒くなるのを感じる。

「わ、私…！ゴメンナサイ！」

何か言わなければならぬのに口がうまく動かず、かみかみで出た言葉は謝罪だけ。

「…良いんだ、君が無事なら」

だが、お兄さんはそんな事を一切気にしない。
私の頭に触ると、撫でながら「…綺麗な髪と可愛い顔が台無しになるところだったな」と、何処かズレた事を言う。

「本当に本当にゴメンナサイ！あ、あの！何かお礼をさせて下さい！」

「…俺には必要無い。さあ、此処は危険だから帰るんだ」

「それでは私が納得しません！」

「…俺が君を助けたのは単なる自己満足、君は今起こった事を忘れても構わない」

「そんな…！」

お兄さんの信じられない言葉に思わず絶句してしまった。

このままでは、私としても納得がいかない、どうしよう……。

「お嬢様ああ！」

その時、音を聞きつけたのか運転手さんが血相を変えて遠くからやってくる。

「……やれやれ、また犯罪者扱いされそうだな」

独り言のようにポツリと呟いたお兄さん。

若干、顔を引き吊らせて抱きしめていた私から離れる。

「あ……」

なんだか急に寂しさを感じた。

「……いいか、月村。もう此処に近づくなよ」

クルリと回れ右をしたお兄さん。

「い、いかないで下さい！」

「……………」

聞こえないのか、はたまた無視をしているだけなのか、此方を一切見る事はなく、駆け出した。

「お嬢様、大丈夫ですか！」

そこへ入れ違いにやってきた運転手さん。
私に怪我が無いか確認する為に優しく体のあちこちに触れる。

「私は大丈夫、あの人が無事に助けてくれたから…」

窓から流れる景色。

美しい夕陽に照らされる世界は街を外れ、今、自分が家に向かって
いる途中であると、改めて認識する。

「お嬢様、危険な目にあつたのに嬉しそうですね」

黒い高級車を運転してくれるドライバーが、ミラー越しに私を見つ
める。

どうやら無意識に微笑んでいたらしい、其処まで景色を見ていた窓
を鏡代わりに覗き込み、自分の笑顔が移っていた。

そう、確かに今日は嬉しい事があつた。

他人を寄せ付けけないような雰囲気を出しているのに、何故か人を引
き付ける人柄のお兄さんに出会えた。

しかも改めて考えてみれば、なのはちゃんの話しに出てきたお兄さ
んによく似ている事に気づいたのだ。

恐らく、いやきつと、正体はあの人に違いない。

早く会いたい。

さっきまでとは打って変わり、今すぐにも会いたい気持ちでいっぱいになる。

なのはちゃんが出会ったお兄さんに…。

そしたら今度は名前をちゃんと聞いて、こつこつ言っただ。

助けてくれて有難う、 『 』 さんって…。

3話 遊星齒車（後書き）

なのはさんと見せかけて、すずかちゃんだぜ！

ヒヤッハー！

<その中で一つ、一瞬だけ見てしまえばゴミと間違えるくらい溶け込んでいる、髪を逆立たせた青年が一番大きな山に座り込んでいた。

<夕陽が沈み、仄かな明るさしか残されていない周りな上に、顔は伏せられ、表情が全く見えない。

この場面は、5D・sで有名なシーンです。

最初のOPに流れる映像で、遊星がゴミの山に座り込んでいるところ。

そして、Z・ONEがアーク・クレイドルで待ち受けていた場所。

あのシーンを見て、もしかしたらあの遊星は遊星ではなく、Z・ONEなのでは？

とか妄想したりもしましたよ。

もしこれが本当なら、スタッフすげえ。

では、今回はこの辺で…。

…どっかに可愛い幼女落ちてないかな。

そしたらあんな事やこんな事を…。

…おや、向こうからピンク色の光が（ry…。

4話 魔法少女（前書き）

どうも。

最近、メーカーを付けられた慧です。

今回はアニメの2話半分くらいまで、進みましたかな？

そして初めての戦闘描写。

難しくて少ししか書かれていませんが、これから頑張っていきます。

4話 魔法少女

なのはs i d e

誰かに助けを求められている声が聞こえる。
それも、ひきりなしに…。

まだ街灯が灯っている、真夜中には早い時間。
その中を息を切らしながら走り続ける。

方角からして私が向かっているのは、榎原動物病院で間違いないだろう。

あと少しで着く、そう思って角を曲がった時…。

両手をポケットに入れて病院の門の前に立つ、あのお兄さんがいた。

遊星s i d e

フラフラと寄り道を繰り返しながら、昨晚泊まった場所に戻ろうと
していた。

しかし、気づけばまた…違う道を歩いている。
フラフラとフラフラと何度も違う道を…。

此処は何処なんだ…。

俺の中の何かが高ぶり、引き寄せているようなこの感覚は、シグナ
ー同士の痣が共鳴している物と似ている。

ふと前を見ると、目の前には榎原動物病院と書かれた建物があるで
はないか。

「あ、あなたは！」

横から驚いた声が聞こえる。

目だけを其方に向けると、今朝出逢ったばかりの少女が息を切らし
ながら俺の下に走ってきた。

「…こんな時間に外に出るのは危険だ、親も心配する。早く帰るん
だ」

「う…！」

冷や汗を垂らして苦い表情をした少女。

昨日の車椅子の少女の事も、言い方が少し説教臭い気がするが、
何か起こっては遅い。

「…俺が送ってやる、一緒に行こう」

「な、なんか…お爺さんみたいな事を言うんですね…」

「……………」

…歳を取るというのは、こういう事か。
自分は気づかないだけで、考え方はガラリと変わるらしい。

「でも私、帰るわけにはいかないんです。誰かに助けを求められて
いるから」

「…何？」

その言い方はまるで、自分が何に助けを求められているのかさえ、
わからないのではないのか。

続けて言おうとした、その時…。

「…これは！」

「え！？」

世界の色が変わった。

失われたように灰色に近い景色ばかりが出来ていき、それと同時に、
病院から大きな物音が聞こえてくる。

それも、破壊するような音だ。

慌てて中に進み、少女も続けて付いてくる。

「あれは！」

破壊された建物の中から一匹の小動物が飛び出し、少女は其方に目

がいく。

だが俺はそれよりも…。

「…なんだ、あれは…!？」

今もなお、建物を破壊し続ける“怪物”を見ていた。

その姿は毬藻まじものようにモコモコしており、悪を感じさせる黒色。

若干コミカルな雰囲気を出しているが、危険な存在である事は理解出来る。

『オ、オオオ!』

何処からその声を出しているのか、黒い毬藻は怒りに狂った様子で吠えると、木に登っている小動物に飛びかかった。

小動物はギリギリのところまで跳躍して交わし、登っていた木は黒い毬藻により、粉々に粉碎される。

そのまま跳躍した小動物だが、勢い余って少女の胸に無事、着地できた。

ポロポロの体を震わしながら、一言。

「来てくれた、の…!？」

「…!？」

「しゃ、喋った!？」

俺は声に出さなかったが、少女と同じように驚いている。

どうやら俺がいるこの世界は、普通ではないらしい。
とんでもない物に関わったが、むしろ都合だ。

…私のやるべき事が目の前にある。

この黒い毬藻から少女と小動物から守るといふ、私が不動 遊星になる為に必要な状況が今、目の前に…！

「…俺が奴を止める、今の内に逃げるんだ！」

少女達を背にし、黒い毬藻に立ちはだかるように立つ。

「え…でも！」

『オオオオオ！』

毬藻が赤い目で俺を睨みつけ、吠え始めた。

来る…！

「…グツ！」

気づいた時には防御をするのに精一杯だった。

毬藻から強烈な体当たりを受け、そのまま外壁に叩きつけられてしまっ。

「…行くんだ！」

「は、はい！」

一度、俺を置いていく事に嫌々だった少女だが、間髪出された俺の必死な声を聞いた為か、泣きそうな表情をしながら、小動物を抱えて走っていった。

…これでいい。

私の目的は誰かを守る事だったんだ。

その為になら、こんな命…幾らでもくれてやる…。

そう、例え差し違える事になっても…！

『オ、オオオ！』

お前を倒す！

「…ウオオオオオオオ！」

なのはside

「ハアハア！」

住宅街を走りながら、喋るフェレットに状況を簡単に説明して貰った。

この子は私達の世界とは違う世界からやってきて、ある物を探しているらしい。

そしてある物を探す為に必要な力が、私には資質があるようで、その資質というのが…。

「魔法？」

「はい、僕の魔法の力をあなたに授けます！御礼もします！だから、力を貸して下さい！」

「お礼つて…そんな事言われても…」

魔法なんておとぎ話に出てくるような、力を私が使えとは思えないし…。

『オオオオ！』

悩んでいる最中、上空から聞き覚えのある声が聞こえる。

こ、この声つてもしかして…！

ドオオオン！という音と共に落下してきた、あの黒い怪物がこっちを睨みつけていた。

しかもその下を見ると、私を逃がしてくれたお兄さんが血まみれで下敷きになっている！

「お兄さん！？」

「そんな！？あの人が魔法使いじゃなかったなんて！」

フェレット君が愕然とした様子で、悔しそうな動きをしていた。

私もつきり、お兄さんならあの怪物を倒してくれるのだと思って、逃げ出したけど、違ったんだ…。

お兄さんも私と同じ、普通の人…。

なのに、私を助ける為に迷いなく庇ってくれて…。

私の、私のせいだ…！

私がお兄さんを置いていく事なんてしなければ、こんな事にならなかったのに！

「…に、逃げ…る」

「お兄さん!?!」

まだ意識はあるようで、巨大な怪物に踏み潰されながらも私に逃げるように伝える。

「…君は」

血まみれの手を震わしながら、怪物に掴み掛かり、動きを少しでも封じようとするその姿は…。

「…俺が守るッ！」

まさしくヒーローだった。

私はその姿から目を逸らす事は出来ず、不思議と心は安らぎ、また…思考がクリアになる。

「フェレット君…」

「な、何ですか？」

「私に力を貸して」

「いいの!？」

良いも悪いも無いよ。

私は只、こんなにもいじらしくて、優しくて、格好よくて、弱いお兄さんを助けたいの。

その為の力が手に入るなら、君のお願いだって聞いてあげる。

だから…!

「私にお兄さんを助けるだけの力を貸して!」

私の決意を聞いて、フェレット君は大きく頷いてくれた。

「これを持って、僕に続いて呪文を唱えて下さい!」

「うん!」

フェレット君から渡されたのは、赤く光る綺麗な丸い宝石。手に持つと、仄かな温かさを感じられた。

「我、使命を受けし者なり」

「我、使命を受けし者なり」

…私はきつと、この瞬間を一生忘れる事は無い。

「契約のもと、その力を解き放て」

「契約のもと、その力を解き放て」

…何故なら例えもし、出逢ったのが偶然であろうと必然であろうと。

「風は空に、星は天に」

「風は空に、星は天に」

…魔法の力を手に入れてこの先ずっと、絶対に後悔をする事は無いのだから。

「そして不屈の心は……」

『この胸に！』

待っててね、お兄さん…。

『この手に魔法を！』

今度は私が…助けるから！

『レイジングハート、セットアップ!』

遊星 side

綺麗だ…。

俺はその光景を一言でしか表せなかった。

霞む視界で一瞬の内に、少女の姿が変わる様子が移し出され、気づいた時には少女の姿は純白のドレスに包まれており、まさしく聖女だ。

『オオオオ!』

毬藻が吠えると同時に、俺に掛かっていた圧迫感が消える。

少女に向かって飛び交っていくのがすぐに分かった。

少女は何の恐れも無い目をしながら杖を真っ直ぐと、毬藻に向ける。

『Protection』

杖から流暢な英語が電子音で流れ、同時に先端からピンク色のエネルギーで出来たと思われる盾で現れた。

『グオオオ!?!』

ぶつかり合い、苦痛の悲鳴を上げる怪物。
バチバチとスパーク音を放ちながら弾き飛ばされる。

「今です！心に浮かんだ魔法を唱えて封印して下さい！」

小動物が合図を送り、少女の目つきは更に鋭い物へと変えた。

「ジュエルシードを封印！」

『sealing mode・set up』

杖が僅かに伸びると、隙間から鳥を思わせる羽が生え、幾重にも生み出された光の帯が怪物に巻きつかれる。

そして怪物に額には、ローマ数字で21の番号が…。

『stand by ready』

「リリカルマジカル、ジュエルシード、シリアル21…封印！」

『sealing』

動きを封じられている怪物に更なる追撃。

今度は光の帯が突き刺さり、気づけば其処には、一つの小さな宝石しか残されていないかった。

『receipt number XXI』

少女が残された宝石を杖で触れると、飲み込まれるように、中へと

入っていった。

「す、凄い……」

小動物の口から思わず素直な感想がこぼれる。

確かに凄い。

時間にして僅かに三分も掛かったかどうか、あれほど強大な敵を瞬にして倒してしまうとは……。

それに比べ、私は……。

「……何も出来なかった」

彼奴と私の違いは何処にある？

存在は同じでも、根本的な物は別物なのか？

血に染まってしまったこの手は、誰一人助ける事さえ、許されないのか？

「お兄さん、しっかりして！」

ドレス姿から元に戻った少女が私に向かってくる。

あなたは、優しいんですね……。

「僕に任せて下さい！」

小動物も私に近寄り、その小さな体を一生懸命光らせる。

すると不思議な事に、体の痛みが少しずつ抜けていくではないか。

傷も塞がっていく…。

「これで、もう…大丈夫」

この治癒には何かしらの力を使っらしい。

息が途切れ途切れになりながら、小動物はゆっくりと倒れた。

「…おい、しっかりしろ！」

「ハア…ハア…」

返事はないが、息はある。

血が少なくなっただせいか、ふらつきながらも駆け寄り、抱きかかえる。

「良かったあ、お兄さんが無事で…」

「…済まない、お前達に迷惑をかけてしまった」

「ううん、気にしないで下さい。私がお兄さんを置いて行ったせいでもあるし…」

自分のせい、か…。

どうやら君は、何にでも自分のせいにしてしまう、自己犠牲な子みたいだな。

まるで…彼奴ように。

「あ…」

「…ん」

耳を澄ませば、遠くからサイレンの音が聞こえてきた。

「あの、私達って…かなりマズい状況なんじゃないでしょうか」

「…あゝ」

確かに周りを見ればヒビが入っただけとは言えない程、破壊されたアスファルト。

怪物が弾き飛ばされた衝撃により、倒れた電柱。

僅か二日にして、三度も同じような展開が俺に待ち受けているとは、運が悪すぎる。

「…とりあえず、逃げるぞ」

「は、はい！」

すぐさま少女の手を握り、引っ張る。

一瞬、少女の顔が赤くなつた気がしたが何時まで見ているわけにはいかない。

しっかりと前を見据え、走り出した。

なのはside

今だサイレンが鳴り響くなか、ひとまず私達は公園に逃げて、互いの自己紹介をしました。

「私、高町 なのは！小学三年生で、みんなは…なのはって呼ぶよ！」

「僕はユーノ。ユーノ・スクライヤと言います」

「ユーノ君かあ、可愛い名前だね！」

これで私達は終わり、あと残っているのは…。

「…何だ、その目は…」

「えへへ！」

公園の木に背もたれながら腕を組んでいる、お兄さんを見て思わず笑ってしまう。

だって、ようやくお兄さんの名前を聞く事が出来るから。

なんだかんだあったせいで、まともに自己紹介もしないで知り合っただけだし、すずかちゃんに良い報告が出来るしね！

「お兄さんの名前を教えてください！」

「…俺の、名前？」

「はい！」

お兄さんはすぐに名前を言う事は無く、夜空を見上げて、何かを迷っている感じがしました。

「…俺は」

そして、その何かを決心したのでしょう。見上げていた顔を私達に向けて…。

「…俺の名は、不動 遊星。宜しくな、なのは…ユーノ」

綺麗な笑顔をしながら応えてくれた。

…あれ？

遊星って、どこかで聞いたような…。

「此方こそ、スイマセンでした。遊星さん、なのはさん…」

私が遊星さんの名前で考えている時、ユーノ君が突然私達に謝りだした。

「僕のせいで巻き込んでしまって、遊星さんには大怪我を負わせてしまいました…」

「私は大丈夫だよ！……多分」

魔法の力を使いたいと思ったのは私自身だったわけだし、ちょっと不安はあるけど、ユーノ君の願いも叶えてあげたいんだよね。

「…俺の事は気にするな、自分と相手の力量を計らずに突っ込んだ自分が悪い。自業自得だ」

自業自得って…。

「そんな事ありません、凄くカッコ良かったです！」

「…？」

「えっと、何て言うか…一生懸命やるつもりしている様子が心に響くと言うか、男らしいと言うか…」

あ、あれ？

私、テンパって何言ってるんだろう？

「……………そうか」

…ほんちよつと、ほんちよつとだけ嬉しそうな顔をした遊星さんは、急に何も言わずに立ち去ろうとする

「え…ど、何処に行くんですか？」

「…お前達とは此処でお別れだ」

「ええ！？」

そんな！せつかくまた出会えたのに別れる事なんて出来ないよ！

「じゃあ、住んでいる場所を教えてください！」

「…そう言われてもな、俺は根無し草だぜ」

根無し草って…まさかホームレス!?

「だったら余計に行かせるわけには行かないの!」

遊星さんの腕に思いっきりしがみついて、行かせないようにする。だって私を助ける為に大怪我を負ったのに、そのまま野宿させる事なんて出来るわけがない。

「…うっ」

私しがみついた反動で倒れそうになる、遊星さん。

そのおでこには汗が浮かんでいて、顔も青ざめている。

「血を失いすぎたせいで貧血を起こしている…栄養がある物を食べさせないと…」

ユ一ノ君が遊星さんの状態を教えてくれた。

やっぱりまだ、無理をしちゃいけないかったんだ。

だったら此処は…。

「私の家に来て下さい!」

「…何?」

「私の家だったら温かいご飯もベッドもあるし、ゆっくり体を休めると思うんです!」

「…しかし、俺みたいな男をつれてきたら家族は心配するぞ…」

確かに、普通に考えてたらみんな驚いちゃうよね…。

特にお兄ちゃんは、心配症な上に何て言うか…信用しない人だからなあ…。

でも…。

「だ、大丈夫ですよ！私が説得します！」

このまま引き下がって、遊星さんを置いていくわけにはいかない。私がしっかりしなきゃ！

より決意を固め、遊星さんの腕をそのまま引つ張り始める。

「さあ、ユーノ君、遊星さん…行こうか！」

「はい」

「…あ、ああ」

4話 魔法少女（後書き）

なのはさん強えええ！

遊星さん弱えええ！

…とか言いたくなるのは、仕方ないと思います。

最強系は別の方で書いているので、たまには弱い主人公も書いてみたいと思っただんですよね。

…オット、クチガスベッタ。

まあ、ずっと弱いわけでは無いので、安心して下さい。

今回はなのはさんのお家に、遊星さんが訪問。

可愛い幼女の部屋に入ったりするとところ書いている途中で、今はもう、羨ましくて溜まらん。

私と変われ。

セキュリティ「慧さん、マーカー追加です」

なん……だと……！？

5話 焦る兄妹（前書き）

多分、焦るってレベルじゃないくらい遊星さんに振り回されるのはと恭也。

恭也スキーはちょっと注意。

どうしてこうなった…。

5話 焦る兄妹

遊星 side

歩いてそう時間が掛からない場所に、なのはの家はあった。

外観は和を基準としながらも、所々に洋を組み入れている立派な住宅だ。

近くには道場も見え、裕福な所で育つたらしい。

「うう…」

初めは意気揚々といった様子で帰り道を歩いていた、なのはだったが、いざ玄関の前に立つと尻込みした。

やはり、こんな時間に帰宅、更には俺やユーノをつれてきたら家族に何を言われるか不安なのだろう。

「…なのは、これ以上俺はお前に迷惑をかけたくない。無理をするな」

少なくとも、俺という存在がいなくなるだけで、家族に不審感を与える事はなくなる。

「大丈夫なの！絶対、私が守りますから！」

「……………」

…お前の今の発言は、嬉しくもあるが…。
自分が情けなくて仕方ない思いになる…。

「誰を守るって？」

突如、右側の塀の影から一人、端正な顔立ちをした青年が現れる。
ギロリと此方を威圧しながら睨みつける彼からは、なかなか面白い
物を感じた。
戦う者、武を扱う者に間違いない。

「お、お兄ちゃん…」

なのはがビクビクしながら、彼の正体を教えてくれる。

「今まで何処に行っていたんだ、心配したんだぞ」

「えつとお、それは…」

やれやれといった様子を出しながらも、笑顔をなのはに向ける兄。
なのはは拳動不審をしながら、言い訳を考え、この状況を抜け出す
方法を探す。

「それにお前は誰だ、まさか俺の妹に何かしたんじゃないだろうな。
返答によっては許さん」

なのはの兄は対象を俺に移し、先ほどまでとは態度をガラリと変え

る。

「ま、待ってお兄ちゃん！この人は…！」

「うわぁ！可愛いー！」

今にも掴み掛かってきそうだった彼が、止まる。

彼とは正反対の方向から今後は、眼鏡をかけた少女が現れたからだ。

恐らく、なのはの姉にあたる人物が、俺の腕の中にいるユーノを見て、目を輝かせながら近づいてくる。

「…抱いてみるか？」

「え、いいの！」

何も深く考えずに、そのまま差し出す。

ユーノは、くてんと力無い状態だが、彼女はそんな事お構い無しに弄くり回している。

「きゃあー！可愛いー！」

……濟まない、ユーノ。

俺が浅はかだった…。

「美由希……しょうがない奴だな」

なのはの兄は呆れ顔になり、此方に対する警戒を緩める。

…この少女、まさか俺やなのはを庇う為に、敢えて自分を利用して場の雰囲気と和ませたのか。

ならば、説明するタイミングは今だな。

「…済まないな、突然やって来て。俺はなのはに助けられて此処に連れて来られた」

とりあえず、出逢った状況を説明するよりも、連れて来られた理由から話す。

まず俺に対する警戒を解いてもらう為には、なのはが俺の恩人である事を伝え、接触したのがわざとでは無い事を知ってもらう。

「助けられた？」

「違うよ！私が助けられたから、此方に連れて来たの！」

なのはは、俺が助けしてくれたと思っていたらしい。
全く真逆の事を言う。

「…違う、なのはが助けくれたんだ」

「違うの！最初は遊星さんが私を助けくれたから、遊星さんが私を助けてくれたの！」

繰り返される応戦。

いや、なのはが…いや、遊星さんが…と、まるで互いに相手を差し出すかのようになり、言い合っている。

なかなか頑固な子だな…。

「どっちなんだ…」

「あらら…」

遂には、しばらく見守っていたなのはの兄と姉が、困り果てている。すると、今まで無かった人影が、住宅の玄関から映し出される。ガラガラと、乾いた音を立てながら開かれた扉。そこには、仲良く寄り添う夫婦がいた。

「もういいだろう、ずっと外にいたら風邪をひいてしまうよ？」

ニコニコと微笑みながら、かけられた言葉は、此方の事を全て知っているかのように聞こえ、器の大きさを物語っていた。俺に視線を合わせると一瞬だけ目を細め、観察しているように見えたが、気が付けば元に戻っている。

「さあ、君も中に入りなさい。話しはそれからだ」

「父さん!？」

なのはの兄は、父親の発言に対して驚きの声を上げるが、本人は大して気にしていない。

「あらあらあ、あなた随分汚れているわねえ。洗濯してあげるからお風呂に入りなさい」

「…いや、そんなわけには……」

口をあつあつと閉じたり開いたりをくり返し、何やら只事では無い。
そんなに赤くなってどうしたんだ…。

「は、はだ、裸…！」

裸…？

お前はまだ10になるかどうかの年だろう。
俺の裸を見ても大して気になる筈は無いのだが…。

「見ちゃったあああ！」

とうとう赤が真っ赤になり、きゃあきゃあ黄色い叫び声を上げながら去って行く。

面白い子…。

やはり若い子供はあんなにも眩しくて、見ている俺を心地良い気分
にさせてくれる。

「…羨ましい限りだ」

恭也 side

「離せ、美由希！」

「まあまあ、落ち着いてよ」

落ち着けだど？

これで落ち着いてられると思っっているのか？

なのはに裸を見せるなど、只の変態ではないか！

お前は自分の妹に危機が訪れようとしているのに、見て見ぬフリなど…！

「別になのはは満更でもないわけだし、ほっとしても良いと思うんだけど……ねえー、ユーノ！」

「チユー」

確かに、なのはが嫌悪している様子は見えなかったが…。

「それにさ、遊星さんはなのはの命の恩人なんだし、別に構える必要は無いんじゃないかな」

命の恩人か…。

彼奴が風呂に入っている間、なのはから事情を説明してもらったが…なんでも、なのははフェレットが心配になり外へ出かけていたところ、車に轢かれそうになったが、奴が身を挺して守ったとの事。

大した怪我は無かったようだが、奴に異常があったらしく、不安になったのはが連れてきたらしい。

御礼の意味も兼ねて。

「いやあ、僕は嬉しいなあ。なのはが心を許した男の人を連れてくるなんて！」

「そうねえ。あの子、私に似てこうと決めたら積極的だから、このままガンガンいってもらわないと！」

父さんも母さんも、何を言ってるんだ…。

相手はどう見ても、10は超えている男だぞ。

年の差はどうなる、いや、それ以前に奴がなのはとそんな関係になるのは許さん！

「どうしてそこまで、あの人を毛嫌いするの？珍しいね」

美由希が眉をひそめながら、俺にもっともな疑問をぶつける。

「俺自身分からないさ…」

「え？」

頭ではわかっている。

奴は悪い男では無い事ぐらい。

だが、それ以上に何かが、奴の中にある何かが危険であると、俺の勘が告げているんだ…。

風呂から上がった後、ろくに自己紹介をする時間も与えずに、客間へと通された俺。

何でも兄が危ないとかどうか、よく分からない事を言っていた気がする。

「はい、あーん」

「……………」

目に写るのは、レバーを箸で摘み、俺に食べさせようとする少女。にこやかだが、頬には朱がさしており、自分がやっている事に羞恥心を感じているからだろう。

ならば何故、そんな事をする…。

「…なのは、俺は食欲が無いんだ」

「ダメ、ちゃんと食べないといつまで経っても治らないですよ」

母親が病気の子供を叱るように、優しさを交えながらジト目で睨みつける。

「はい、あーん」

なおも俺に食べさせようとする。

だが、俺としてもこのまま引き下がるわけにはいかない。今まで機

械以外の介護無しで生きていたのだ、自分の事は自分でしないと自身の何か大切な物が失われる…。

「…なのは、俺は自分で食べる」

「ダ、ダメ、遊星さんは私が面倒を見るの」

どうやら逃げ道など無いらしい。

腹を括った俺は、漸くレバーにかぶりついた。

「おいしい？」

「…ああ」

見た目は少々雑な切り口ではあるが、味付けはしっかりとっており、食欲が無い俺でも美味しく頂ける。

だが、なのはは何が不満なのか僅かに頬を膨らませムツツリした顔をしていた。

「なんか、おいしくなさそうに食べてる…」

なるほど、そういう事か…。

昔から俺は表情が堅いから、よく似たような事を言われていたよ。

言葉でもなく、表情でもない方法で、相手に気持ちを伝えるにはどうすれば良いのだろうか…。

俺はどうにも、この手の事に関する方法が分からない。

『じゃあ、遊星。お願いがあるの…』

その時、昔、似たような出来事があった事を思い出し、どうすれば良いかと、『彼女達』に尋ねた時にお願ひされた事をすれば良いのだと気づいた。

「…なのは、こっちに來い」

「?」

疑問に感じながらも、皿と箸を置いて素直に俺のそばまでやって來る。

「うわぁ!」

そのまま腕と腰に手を伸ばして、いきよよく俺の方へ引つ張った。

「え?え?」

目をパチクリさせるのは。

少し混乱しているらしいが、俺は俗に言うお姫様抱っこという物をしている。

そして、耳に口を近づけて小さく囁いた。

「…美味しいよ」

「うひゃあ!」

「…可愛いな」

「にゃあ!？」

「…キスしてやるのか？」

「にゃあああああああ!？」

結果は大失敗だった。

『彼女達』とは違い、抱いている俺さえも熱くなるぐらい赤くなっただなのは、あの時のユーノのように、クテンと力尽きた。

「離せえ、美由希!なのはに貞操の危機が訪れようとしている!」

「ちょっと静かにしてよ…!もう少しで良いところなんだから…!」

何やら扉の向こう側から、聞き覚えがありすぎる声が聞こえる。恐らく、いや間違いなく、なのはの姉と兄だろう。

気絶しているのはをベッドに寝かせて、おもむろに扉を開く。すると雪崩のように倒れながら部屋に入り込んだ二人。どうやら盗み見聞きしていたらしい…。

「…大丈夫か」

両手を伸ばし、立ち上がるのを手伝おうとする。だが、どちらも手を掴もうとはせず、姉は苦笑いを浮かべながら後退。

兄の方は怒り顔で俺に掴み掛かろうとした。

俺は条件反射で掴み返し、投げ飛ばしてしまっ。

しまった…！

「くッ！」

彼は慣れた手つきで受け身をとり、怪我をする事は無かったが、まさか自分が投げ飛ばされるとは思ってなかったようで、その表情は悔しがっている。

『妹を守るのがお兄ちゃんの役目だからな！龍可は俺が助けてあげないと！』

今の彼は、まさしくあの子の姿そのもの。

無意識とはいえ、その思いを潰してしまうとは…。

恐らくきつと、また傷つけてしまつかもしれない。

何ともやりきれない気持ちだな…。

なのはは……まだ気絶しているか…。

「…どうやら俺は、此処に居ない方が良いみたいだ」

「何？」

「…済まない、悪気は無かった。今すぐ出て行く、俺の服は何処だ」

「ちょ、ちょっと待ってよ…！」

足早に歩く俺を止めようとした姉だが、それを聞かぬフリをして階段を下りる。

「あら、どうしたの？」

母親が今まさに俺の服を洗濯機に入れようとしていた時だったので、横から奪い取る。

「…服はいずれ、洗ってから返す」

それだけを伝え、服を脇に抱えると玄関を抜け、外に出る。

「どこに行くんだい？」

後ろから話しかけてきたのは、なのはの父親。

相も変わらずニコニコとしており、その腹の奥底では何を考えているのかは分からない。

「…お前達に迷惑をかけてしまった、だから出て行く」

「何も伝えずに？」

お前達に他に伝える事が…。

そうだったな、忘れていた…。

「…世話になった、ありがとう」

僅かばかりとはいえ、衣食住を提供してくれた良い人達だ。

なのはの兄は龍亞のように、家族を大切にしているが故の行動だっ

だから、俺自身としては不快に思っただけだ。

むしろ、懐かしい気持ちにさせてくれた。
楽しかったよ…。

「んー」

しかし、彼としては何か不服らしく、苦笑しながら唸り始めた。

「そうじゃないんだ。僕が言いたいのは、君自身の事を伝えなくていいのかもしれない事」

「…俺自身？」

「好きな食べ物や嫌いな食べ物、得意な事や苦手な事を教えて欲しいんだ。そうすれば、君がどんな人柄なのか分かるだろう？ 恭也もきつと、君を気に入ると思う」

なるほど。

相手について深く知るには、結局話し続けるしかない。

彼は、それを俺にさせる事で、なのはの兄が俺と仲良くなるようにさせたいのだ。

だがな、それ以前に問題があるんだよ。

「…俺とは関わらない方が良い」

ろくな目に遭わない事に決まっている。

「そこまで拒絶する理由は何だい？」

それは、私が人殺しで親不幸者で裏切り者で死にたがりで、自分の事しか考えないような…。

「…最低の屑だからさ」

「……………」

彼はもう、何かを言う事は無い。

悲しそうな表情をしながら、口を塞いでしまう。

「じゃあ、せめてこれだけでも持って行ってね」

いつの間にかそばにいたのか、母親がタッパーを俺に差し出す。

「…これは」

中身を確認すると、先ほど食べていたニラレバが温かい状態が入っていた。

「あの子、アナタの為に一生懸命作ったのよ」

そうか、だから切り口が少々雑だったのか。

まだ料理を習って間もないから、悪戦苦闘する時もあったのだろう。容易にその場面が想像出来、思わず顔がほころんでしまう。

「…頂こう」

「また来てね」

手渡されると同時に母親から一言付け加えられるが、俺は応えずにそのまま去った。

だってそうだろう？

守れる約束じゃないのだから…。

まだ機械兵士達にあまり攻撃を受けていない、街へとたどり着いた俺達三人。

地下へと続く秘密の道に入ると、仲間達が慌てた様子で駆けつけてきた。

「大丈夫だったか、遊星！」

「ほらねジャック！私の言うとおり、ちゃんと帰ってきたんだから！」

金髪の好敵手とその恋人が真っ先に話しかけて、アキと龍可を見せると安心した表情をする。

「龍可、無事だったんだな！流石遊星だぜ！」

俺と同じくらい身長が伸びた龍亞が、目尻に涙を溜めながら、二カ
ツと笑い、肩を組む。

「…お前達も無事、たどり着いたんだな」

だが、俺の言葉を聞いた瞬間、みんなの顔が暗くなった。

「遊星、こっちに来い…」

いつになく険しい表情をしたジャックに案内されたのは、簡易の保
健室。

消毒液の臭いが充満する空間のベッドに一人、誰かが寝ていた。

いつも橙の髪を逆立たせている彼が、珍しく下ろして、包帯だらけ
の姿で苦しんでいる。

「…クロウ！」

何故、こんな酷い姿に…。
それにこの顔…。

「…マーカーだらけじゃないか！」

昔、犯罪者が脱走しても追跡出来るように開発された、絶対に消え
ない発信機。

それが今になってどうして…。

「聞いた話によると、最近機械兵士達がこれを利用しているらし
いのだ…」

「…何!？」

「奴らは日々『進化』している。ただ無差別に殺すよりも、拷問を行ってアジトを吐かしたり…」

「…マーカ―を書いてわざと逃がし、アジトを探るという事が…!」
「そうだ」

クツ!何が『進化』だ…!
こんな残虐的な事を行う為に、生まれた技術が使われるとは…!

「遊星、お前ならジャミング出来る装置を作れるか？」

「ああ、クロウの為に、何としても…いや!必ず作り出す!」

真夜中の神社のトイレに、一人の青年が鏡を見つめていた。

映る自分の顔には、忌々しい黄色線が嫌でも目に入り、指でなぞる。

「…嫌な事を思い出してしまったな」

5話 焦る兄妹（後書き）

恭也が可哀想！と思うかもしれませんが、彼には遊星さんの為に、龍亞と似たような行動をしてもらいました。

妹の事になると周りが見えないタイプ。

アンチでは無いです。

というより、自分はアンチが苦手です…。

後は、無意識でなのはに変態行動をやってしまう遊星さん。

天然です。わざとじゃありません。

作者の陰謀なんてありません。

では、この辺で…。

……………。

…え？

いつもの変態発言はどうしたかって？

読者に自重して下さいと言われました…。

でも復活を望むを人がいれば……いや、流石にそれはないか……。

6話 与えられる物(前書き)

最初は遊星の過去話しで、その後は土郎さん side

そしていきなり次の日になって、はやてちゃんが登場だクマー。

6話 与えられる物

「英雄、だと？」

ディスプレイに向き合っていた青年が、耳を疑った様子で振り返る。其処には腕を組んで、ジャケットが納得いかんと言わんばかりにふんぞり返っていた。

「ああ…お前、前に親子を助けた事があつただろう？」

「……………」

前と言っても、つい最近。

アキと龍可を迎えに行く前に街が機械兵士達に襲われていて、危うく破壊されたビルの瓦礫で下敷きにされそうだった女の子と、その母親を助けた。

「その母親がカーリーの上司に当たる人物で、ネットにお前の事を英雄と呼んで記事にしている」

ディスプレイに移していた映像を切り替え、自分の名前で検索をすると、一番上に表示された。

*月*日

本日未明、とうとうネオドミノシティに次ぐ、大都市である此処、

シティも機械兵士に蹂躪されてしまう。

湧き上がる悲鳴、恐怖に顔を歪め逃げ惑う人々の中でまた、私も娘と共に避難していた。

しかし、自分達の事しか考える事が出来ない人達は、私の娘さえも押しのけてしまう。

私は離れてしまった娘の下へ駆け寄り、抱き上げようとしたが、突如最寄りのビルが崩れ始め、私達の真上から人の大きさはあるかという破片が降ってきた。

もう、終わり。そう思って娘を強く抱きしめた時。

何処からかDホイールの爆音が響きわたり、遠くから正確無比の射撃で破片を撃ち落とす人物が現れたのだ。

彼は私達の近くまでDホイールを近づけると、大丈夫かと言尋ね、私はそれに答えるよりも恩人の名前を尋ねてしまう。

「俺の名は不動 遊星」

そう言うと、彼は再び走る。

機械兵士達から人々を助ける為に。

…数時間後、彼の活躍により事態は鎮圧化し、人々は彼を褒め称える。

しかし彼は、その事を全く気にしていない様子で人々に近く、すると信じられない事に彼はみんなに対して喝を吐いたのだ。

何故、あの親子を誰も助けられないんだ。何故、あの女の子を押し倒し

てしまうだ、と…。

私は感動で胸がいっぱいになった。

彼は…不動 遊星は、自らの行いに驕る事なく、人々を良き道に導こうとしているのだ。

この絶望を乗り越える為に。

あれから私の娘はすっかり不動 遊星のファンになり、将来は結婚すると微笑ましい事を言っただけ。

今では本当に感謝している。

彼のおかげで娘は今日も笑っているのだから。

私はこれからも彼の活躍を記事にしようと思う。

彼の活躍はきつと、人々の心を突き動かす。

そして何よりも娘も喜ぶ。

だから大々的に彼には、この名声を与える。

喝を受けた人々から小さい声でポツリと彼に対して呟いた…。

英雄と…。

「…興味が無い」

ズバリと斬り捨てるように青年はハッキリと感想を述べる。

最後まで読んだのは、彼自身が律儀な性格であるが故だったが、正直者でもあるので嘘偽りでは無いのは明白。

ディスプレイをすぐさま元に戻して、作業を続行させた。

「お前という奴は、本当に欲が無いのだな……」

感心と呆れが混じった様子で、好敵手がそんな彼に対してしみじみと思う。

「……欲が無いんじゃない、与えられる物が欲しい物ではなかっただけだ」

青年の趣味は機械弄りとデュエルのみ。

地位など興味も無く、ましてや名声など、邪魔でしかない。

「フン、それにしても……何故キングである俺が記事にされていないのだ……」

相変わらずプライドの高い彼は気に入らないらしい。

大の大人がむくれる異様な姿をした。

昔からこうだ、嫌な性格でもあるが良い性格でもある。

不動 遊星はジャックのそんな性格が信用出来、何より嫌いではなかった。

「じゃあ、あれだ。その……」

だが突然珍しく口ごもる好敵手。

遊星は思わず振り返ると、ジャックは頭を片手で支えながら小さい声で話した。

「アキや龍可とは、どうなんだ？」

すぐ近くで見続けている此方としては、なかなか歯痒い思いしかない。

どちらも遊星に対して好意を持っているのは間違い上に、彼もいい加減それに気づいている筈…。

「…俺は今のままで充分だ」

悪気は無いのだろうが、酷かった。

遊星自身にとって愛や恋は、数字や記号より難しい。

今のまま、つまり仲間という関係が一番変に意識をしなくて楽なのである。

しかし、ジャックは一切同意しなかった。

目つきを鋭くし、遊星に詰め寄る。

「いいか遊星、仲間と恋人は全く違う。お前がそれで良いとしても、アキと龍可は違つかもしれないのだ」

「……………」

「もし、伝えたくても伝えられなくなる事が起きたらどうなる。その糧は一生苦しむぞ」

どんな状況にもポジティブに対応するジャック・アトラスといえど、人の子である。

過去に己が受けた苦しみ、悲しみの中で一番嘆いたのが愛する者を失った瞬間だった。

今は取り戻したとはいえ、あんな思いをするのは、もううんざりだ。だからこそ遊星に、愛に関しては後悔をして欲しくない。

「…お前のその言葉は失ったらという事だ。安心しろ、俺達は1人も欠ける事なく未来を生きていける」

だが遊星はジャックの言うことを聞かず、ディスプレイを閉じ始めた。

そして手元でカチャカチャと何かを組み立てる音を発てたと思ったら、ジャックに向かって何かを投げ渡す。

「…クロウに渡してくれ、俺は少し休む」

遊星に渡されたのは、一見にすると只の小さなピアスにしか見えないうアクセサリー。

しかし渡す相手がクロウなのだ、ジャックはすぐにそれが何なのかを理解した。

「まさかジャミング装置！もう完成させたのか!？」

「……………」

遊星は何かを応えるのではなく、手だけを小さく振って、さっさと部屋から出て行く。

「遊星め、逃げたな」

ある意味では自分よりも難しい性格をしていると、溜め息をつきながら、しみじみと思うライバルであった。

士郎 side

「お兄ちゃんのバカあ！」

「す、すまない……」

我が娘ながら、なかなか迫力のある怒鳴り声を上げる。
普段は兄の方が上の立場だが、今はまるで逆。
土下座でもする勢いでひたすら恭也はなのはに謝り続ける。

やがて気が済んだのか、なのはは自分の部屋に戻っていったが、僕はその時、目尻に涙が溜まっていたのが一瞬だけ見えた。

勿論、恭也にも……。

「……………」

「修行が足りないね」

すっかりとしよぼくれてしまった、恭也の肩に手を置いて指摘と同時
時に慰める。

「ああ、あの遊星つて奴に全く齒が立たなかつたよ……」

どうやら僕の言い方が間違えたらしい、恭也は僕が考えている事と

は別の事を口に出す。

「んー、違うね」

僕の言葉を聞いた瞬間、恭也は一瞬固まり、疑問そうな顔で此方を見る。

「あっさり投げ飛ばされてしまった事じゃないのか？」

確かにそれもあるけど、恭也は既に遊星君と会った瞬間から負けていたんだ。

「お前、遊星君を見た時、恐怖しただろう？」

「!？」

その表情は凶星か、あるいは自分さえも気づかなかった事か、恭也は僕も思わず驚く程ビックリした顔をした。

「お前が彼に対して常にしかけていたのは、怯える犬が吠えるようなものだ」

大切な何かを守る為に、怖くても怖くても、尻尾を垂らしながら唸る様子と考えればわかりやすいだろう。

人も動物。

やることなすこと、変わりはない。

「父さんは、どうだったんだ？むしろ歓迎していたが…」

我が息子の前、少々格好悪いところを知られたくなかったが、今回は正直に話す。

「僕は、怖かったよ…」

どれだけ痛みを知っても、どれほど苦しみを知っても、彼の目を見た瞬間全てが吹き飛んだ。

僕は今まで色々な人を見ている。

彼は表面上では綺麗な目をしているが、その裏からはドス黒い何かが浮き出ているのがすぐに気づいた。

怒りでも無く、悲しみでも無い。

あれはまさに…狂気。

善悪の区別が付かなくなり、己の望みの為ならば手段を選ばない獣だ。

「いや、違う」

「え？」

彼は獣では無い。

それ以上に荒々しい存在で神々しく、神秘的で大いなるもの。

「彼は、龍だ」

普段は静かで気高い龍。

だが、一度逆鱗に触れてしまえば破壊の限りを尽くし、暴行を行う。邪魔になる者は全て消し去る程。

だから僕は彼が怖いと思った。

なのは達に危険が及ばないか不安になった。

だけど、龍が味方になればどうだ？

これ程頼もしい事があるだろうか。

大切な娘であるものには、昔から寂しい思いや辛い目に合わせている。

そのせいであの子は僕達に迷惑をかけないよう、なんにでも自分の内に押さえ込むようになった。

そして今日、連れてきた遊星君に対してなのは初対面なのに積極的に関わろうとした。

一生懸命世話を焼いていたが、それは彼に対して恩を感じているからだ。

恩を感じるのは、遊星君自身に頼りがいがあるからこそ。

僕は嬉しかった。

なのはが頼りにしている人が現れた事を、それも赤の他人でだ。

遊星君を利用する意味では無いが、彼にはなのはのそばにいて欲しいと思う。

あの子の苦しみを一緒に背負ってくれる筈だから。

…本当に、僕って。

親バカだね…。

はやて side

「それじゃあ、はやてちゃん。また明日ね」

「はい、先生ありがとうございます」

日課である検査を受け、担当の石田先生に挨拶をする。

今日は特に異常は無く、体調も優れているので図書館に行く伝え方が…。

「ダメ！」

あまりにも必死な形相で許可を許さなかった。

疑問に思い理由を聞いてみると、最近図書館近くになるトンネルとゴミ捨て場に怪しい人物がいるから危険との事。

人相を尋ねると、髪を逆立たせていて黄色のメッシュと同じく黄色のタトゥーらしき物をしているらしい。

それってどう見ても、あのお兄さんやね…。

勿論、そんな事を聞いて引く私ではない。

むしろ行かなければならなかった。

あの時、御礼も出来なかつたし、悪い人扱いされたままだと勘違い

し続けているかもしれないからだ。

担当医に心の中で謝りながら車椅子を移動させていると、居た。

というより寝ていた。

鉄板やダンボールで風を凌ぎ、トンネルの僅かな隙間の中で静かな寝息を立てながら呑気に寝ている。

昨日は夜更かしでもしたのだろうか。

もう既におてんと様が登りきっているというのに、すっかりと熟睡しているお兄さんからは一切目が覚める様子を感じられなかった。

慎重に車椅子から降りて、下半身を引き吊りながら上半身のみでお兄さんの下へ移動する。

柔らかかそうなホッペタを指でツンツンつつくと、イヤイヤと顔が逃げた。

「お兄さん、可愛いなあ」

そして更につつく。

「ツンツン」

「……ん」

まだまだつつく。

「ツンツン」

「……………」

もっとうつく。

「ツンツン」

「…何をしている」

ジト目で私を見つめるお兄さん。
眠たそうな表情で伸びをすると向き合ってくれる。

「お兄さんは、お寝坊さんやなあ」

「…昨日、寝るのが遅かったただけだ。お前は何故此処にいる」

「そんなの決まってます、お礼を言う為ですよ」

「…?」

どうやらお兄さんは自分がやった事の重要さに気づいていないらしく、キョトンとした顔をする。

無自覚の親切であった事を知る私は、余計にお兄さんが気に入った。

「この前は悪い人から助けてくれて、ありがとうございます」

そして私がお礼を言うと漸く意味が理解出来たようで、小さく「…
ああ」と呟く。

「…気にするな、むしろあの状況をどうにかしない奴らの方がどうかしている」

「それでも私は嬉しかったです。やっぱり見てくれる人はいるんだなと思つて」

はやて自身は気づいていないが、その言葉はまるで、自分が常に一人である事を表しているのは言うまでもない。

そしてこの男が其れに気づかないわけがなかった。

「…お前は一人で暮らしているのか」

「はい、そうです」

無論、はやてはこの事に関して強く主張するような子ではなかったので、遊星に尋ねられても何でも無いと言つた様子で答える。

「…そうか」

お兄さんはそれだけ言つと再び寝転がり、私に此処は衛生上悪いから早く帰れと伝えた。

だけど私としても、只お礼を言つただけで気が済む筈が無いので何とか私が満足出来るくらい恩返しは出来ないかと聞いてみた。

「何かお金や、物を差し上げる事でも良いので…」

「…お前、じゃなくて…名前は？」

「はやて、八神 はやてと言います」

「…はやて、俺はお前に恩返しをされても困るだけなんだ。もう一度言う、さっさと忘れて帰ってくれ」

その様子は只恩返しを受け取りたくないのではなく、何故か私と関わる事をしないようにしているように思えた。

「お食事でも良いですし、なんなら宿を提供しても…」

お兄さんの生活スペースは大人1人でギリギリな上に、衛生面でも良いとは決して言えない。

普通、不審者と疑われている人を家に泊めようなど正気を疑われるような行為だが、私はこの人が悪い人ではない事を知っている。

そしてなにより、あの夜に味わった優しさ。

私はそれを手放したくなくってしまった。

あと少しでも良いから一緒にいたい。

また寂しい思いをするのは嫌や。

「…俺はもう一眠りする。帰れよ」

ただお兄さんはそんな私を対知らずに、とうとう目を閉じて眠ろうとした。

だったら私にも考えがある。

僅かな隙間を抜けながら更にお兄さんの下へ近づき、お腹の上に乗りに上げた。

「お兄さんが私から恩返しを受けるまで、此処から動かへんからな

あ

「……………」

何も答える事なく、無言になった。
もしかしたら既に眠っているかもしれない。

ならば私もと、お兄さんの胸に倒れ込む形で横になる。
逃げ出さないよう、しっかりとしがみつき、不思議で優しい香りに包まれながら、私も目を閉じた。

遊星 side

スウスウと小さな寝息を立てながら俺の上で眠っているはやてを見ながら、罪悪感に苛まれる。

いくらなのはの二の舞にならないようにする為とはいえ、もう少し断り方に他の方法があったと思う。

だが、あの時はそんな余裕が全く無かった。

この子が俺に近付こうとする度に、俺の中に眠る彼女達の優しかった記憶を呼び覚まされ、激しい頭痛と嘔吐感が襲ってくるのだ。

しかし、同時にこの子の優しさに心が温かくなる感覚が現れたのも事実。

はやての頭に手を伸ばして起こさないよう、優しく撫でる。
こうする度に自分の尖りきった氷刃が溶けていくのだ。

愛おしくて堪らない。

私には許されない感情だとわかっていながらも、どうしようもなく
押さえられなくなり、遂にはやてを両腕で強く抱き締めてしまっ、
俺だった…。

6話 与えられる物（後書き）

やけに綺麗なキング：いや、なんでもないッス。

こんな感じでこれからも節々に過去話を練り込んでいきます。

あと、はやてが遊星に会った時、眠っていましたよね。

あの時遊星は、最初の過去話し、つまり過去を夢で思い出していたのです。

更に言うと、はやてが遊星を起こした時、遊星が「：昨日寝るのが遅かったただだ」の言葉は、そのままの意味ではなく、過去を夢みてたので寝ぼけていたという事。

なんでこんな周りくどい事をするかというと、只の自分の趣味です。

文章のあちこちに意味深を載せて、読者の方が気づいてくれるかなと高みの見物をしながらwktkしている地味な意地悪。

多分これからも出ると思うので、暇つぶしに探してください。

どうでも良い追伸。

確か、化物語で「本当のロリコンは自分の事をロリコンと思っていない」と書かれていた記憶が…。

何故なら幼女を1人の女性と見ているからとの事。

ならば、ヴィータを常に性的な目でしか見ない私は、普通だな！
キリ

7話 苦い砂糖、甘い珈琲（前書き）

今回はアリサちゃんがクマーで、はやてと遊星はクマーなんだクマー。

過去クマーもちよつとあるけど不動博士クマーでクマーで、遊星クマー。

どうしてこうなったんだクマー。

7話 苦い砂糖、甘い珈琲

「一緒にご飯食べよう、すずかちゃん。アリサちゃん」

魔法少女になった翌日も、彼女の基本的生活に変わりはない。年頃の小学生らしく仲の良い友達いつもの通りに屋上で弁当を広げ、楽しいおしゃべりをするが、今回だけは少々違った。

「ゴメンね、すずかちゃん！」

「どうしたの？」

突然親友からの謝罪で目をパチクリとさせてしまわず、そしてアリサだったが、なのはからの事情説明ですぐに理解する。

アリサ side

「そっかあ、あのお兄さんにまた会ったんだ」

なのはがすずかに伝えた事はなかなか複雑な内容で、結果的にその遊星という人物は見つかって助けられたが、すぐに出て行ったら

しい。

正直、すずかはがっかりしているものと思ったけど意外にも納得した様子で何度も頷いていた。

「あの人らしいね」

「え？」

「実はね、なのはちゃんの話聞いた日の放課後に、その人と会ったの」

「えええええ！？」

思わずなのはが驚いたけど、勿論私だって驚いている。

大声で、会ったの！？…と言いたかったが、ご飯が口の中に入っているので無理だった。

気が強く、がさつと思われがちな私だけでも、一応いいところのお嬢様であり礼儀も仕込まれているので、自分の行動には細心の注意を払っている。

しかし、すずかの話しによるとこれまた信じられないというか…どんなヒーローとヒロインだ…と、思いたくなる救出劇だった。

思春期に突入しようとしているなのは達にとって、そのような救出劇はまさに良い異性を見つけて心踊ったのだろう。

自分は割と恋愛物を淡白に見ているので、そんな事があってもせいぜい親友止まりだろうかと、喋れない変わりに冷静に判断する。

「でも、名前を知らないなら違う人かもしれないの。特徴を詳しく教えてくれないかな？」

「うーん、飲み物で例えると…」

飲み物！？

どうして特徴に飲み物なの！

ツッコミたい、だけど丁度ご飯が口に入っているから出来ない！

「ミルク抜きで砂糖が入ってるコーヒーかな？」

い、意味がわからない…！

ミルク抜きで砂糖ってどういう事！只、甘いって事じゃないの！ミルク抜きはどんな意味！

「あー、間違いないね。遊星さんの」

間違いないの！？

二人だけしかわからない内容じゃ、私凄く寂しいし、悲しくなるじゃない！

勝手に納得するんじゃないわよ！

「なんとなくか、なのはちゃんの言った通り変わっていて、不器用な人だったよ」

「ふーん」

「……………」

すずか自身は気づいているかわからないが、遊星について語るその表情はふにやけていて、他の者が見れば目を丸くするだろう。

しかしなのはどこか釈然としない様子で相づちを打つ。

共に昼食を取っていたアリサはそんな2人をそばから眺めているが、状況をすぐさま理解し、冷や汗を全身から吹き出しながら黙りを決めていた。

だって怖いのだ、怖すぎるのだ。

表向きでは一番気が強いと思われる自分だが、私は知っている。すずかはああ見えて芯は通っている子なので、いざとなると気を振り絞って自分の意見を言う。

私よりもはるかにしつかりした子だ。

そしてなのはは…時々小学生なのかと疑いたくなるくらい、凄い事をやっています。

一年の時、思いつきり叩はたかれた頬が思い出す度にジンジンと熱くなるのを感じる。

その2人が対抗する事があつたりすればどうなるか……。

想像しただけで食事のスピードが落ちていく。

アリサは知っている。

この仲良し組の中で一番気が弱いのは、自分であると。

はやてside

「…おい」

ゆさゆさと揺さぶられ、誰かに耳元から喋りかけられる。
虚ろな意識の中眠り眼をこすり、ぼやけた視界を明確にすると……。

「…起きたな」

「……」

鼻と鼻がくつつく程近くに顔を寄せている男の人がいた。

一瞬で顔から火が出る程真っ赤になるのを感じ、悟られぬよう、顔を伏せて隠す。

「…どうした」

お兄さんは不思議そうな声で私に聞いてくるが、素直に答える勇氣なんてない。

「寝起きの顔を見られたくなかっただけです」

私にしては珍しい程か細い声が出て、いかに緊張しているのが尚更わかってしまう。

「…そうか」

何とかごまかせたようで、お兄さんは一言だけ告げるとうつ伏せに乗っかっている私の体に手を伸ばし、ぎこちない様子で抱きしめた。

「ど、どうしたんですか？」

突然の事で一瞬、声がどもってしまったけどなんとか立て直し質問をすると、お兄さんは「…此処から出る」と一言告げ、そのまま私を抱きかかえながらスルスルと器用に狭い空間から抜け出す。

そして私を入り口に止めていた車椅子に乗せると、押し歩き始めた。

「何処に行くんですか？」

「…君を家まで送る」

「アカン！お礼をさせてくれるまで、家には帰らへん！」

つい、敬語から関西弁に変わってしまったが、仕方がない。

これに関して私は絶対に譲るわけにはいかない。

そんな風に軽く見て欲しく無いのだ。

お兄さんは歩みを止め、私の前に回ると、無表情を目だけ笑顔にする。

「…安心しろ、お礼は素直に受け取るさ」

「え？」

「君は中々頑固だからな、いつまでも一緒にいるつもりだっただろっ？」

頷き、お兄さんも無言で頷くと再び車椅子を押し始める。

ちよっと拍子抜けしまったけど、少し時間が経てば喜びが実感出来た。

「えっと、ありがとうございます」

お兄さんはキョトンとし、クスリと笑うと、何故そっちがお礼を言うんだ？と、もっともな事を言った。

「あはは、そうですね」

…久しぶりだ、声を出して笑うなんて。

先生はよく、大きな声を出して笑うのを心がけなさいと意味深に言っていたけど、今、その意味を理解した気がする。

「…ところで、はやて」

お兄さんは突然、笑顔から苦笑いになると、照れくさそうに私に話しかける。

「…君の家は何処にあるんだ？」

今度は私がキョトンとする番だった。

完璧超人に見えるお兄さんが見せた、天然、あるいはドジ。

可愛らしくて面白くて、私は元気いっぱい、笑顔で答える。

「逆方向や!」

この瞬間、なんとなく私達の距離はぐんと縮まった気がする。

お兄さんが常に纏っていた分厚い空気の壁とも言える雰囲気が一気に霧散したからかもしれないから。

遊星side

目の前に写るのは、普通の二階建て住宅。

外壁は綺麗に清潔感溢れ、庭も綺麗に整備されているのがすぐにはわかった。

はやてはこの家で一人暮らししていると言っていたが、掃除はどうしているのか気になり尋ねると、彼女はさも当然といった様子ですべて自分でやっていると言う。

俺はしばらく開いた口が塞がらなかった。

たださえ未だに10才にいくかいかないかの年齢な筈なのに、その上両足が不自由なのだ。

それなのに家事は全て自分でこなすとは……。

「さあ、ドンドン上がってなあ」

はやてに促され家にお邪魔する。
やはり家の中も綺麗だ、掃除が行き届いている。

だが、1人暮らしにしては広すぎる立派な空間。
これがはやて自身にある、寂しさを増幅させる皮肉が物語っているのは間違いなかった。

「遊星、好き嫌いはあるん？」

エプロンを慣れた手つきで着るはやてに、名前を呼ばれる。
俺の自己紹介は此方に来る前に軽くしたので問題はなかったが、更にはやてから何故彼処に住んでいるのか、家族はどうしたとか、答え難い質問には少々手こずり何とかごまかした。

しかし彼女はやたら鋭いところがある。
ごまかしたつもりでも何処か納得したフリをして、しきりに考え事をしていた。

200年以上は生きていた私は口の上手さになんか自信があったが、この子だけには勝てる気がしない。

「…済まない、食欲はあまり無いんだ」

嘘ではない。

はやてに悪いと思ったが食欲が無いのに食事を出され、残してしま
うような事があれば尚更悪いと思い、断りを入れた。

「そんなら、お礼はどうすればいいん？」

俺自身もどうすれば良いかと悩んでいると、はやてはニヤリと意地の悪そうな笑顔をする。

「もしかして私の体が欲しいん？」

「……………」

やはりはやては、年相応の子ではなかったようだ。

その手の知識が豊富なようで、黙り込んでしまった俺を流し目で見つめながら、ホレホレと上着を捲ったり、戻したりと繰り返し返している。

「なんやつまらないなあ、ピチピチの女の子が誘っているんやで、なんか言わんと」

マせているな。

殆ど絶壁に近い胸元を頑張っで見せようとするところが、妙に微笑ましく軽く笑う。

「…感心しないな。女の子はもっと慎ましくしないと」

「む、爺臭い事言ったらモテへんで」

心の片隅でドキッとするが、表情は変えない。

大人の……いや、年寄りの余裕を持って受け流す。

「…少なくとも、お前よりは爺だからな」

「…むむむ…」

俺にもし、娘、あるいは孫がいたのならば、こんな会話をしていたのだろうか。

「…そうだな、お礼は洗濯機と風呂を貸してくれれば俺は十分だ」

「欲が小さいで、どうせならしばらく一緒に住んだらええよ」

いや、その会話にしては、どちらも本当に年相応ではないよな。

「…しかし、そこまで世話になるわけには……」

「だから、遊星は私の家事の手伝いをしたらええの。その変わり私は、衣食住を提供するから」

恐らく俺は歳から、はやては1人暮らしから。

度重なる苦行が互いを傷つけもし、強くもした結果の会話だろう。

「…いいのか」

「ええで！」

なのはの時は、あれほど出て行かなければと思っていたのに、はやての場合では心が揺らいでしまう。

それははやてに同情しているからなのか、はたまた傷の舐めないか……。

今この時はまだわからないが、俺が彼女の誘いを素直に受け取ったのは、言うまでもない。

「…早速だが、はやて」

「んー？」

「…俺が風呂に入れてやる」

「ええ！？…ちよつ、それはアカン！」

「…俺に体が欲しいのかと、聞いたくせに何を言っているんだ。安心しろ、手は出さない」

「そうじゃなくて、心の…心の準備が…！」

「…大丈夫だ。俺は慣れている」

「アカンてえー！ー！」

複雑な計器が散乱している部屋に、白衣を着た一人の男性がパソコンの画面と向き合っている。
肌は健康的な浅黒い色だが、その目にはクマが出来ており、十分な睡眠を取れていない事を物語っていた。

「…お疲れ、父さん」

「遊星か…」

遊星と呼ばれた青年は彼とそっくりな顔をしており、無表情だったが、父親の方は人が良さそうな笑みを浮かべて息子の帰りに喜ぶ。

「…また機械兵士の研究？」

「ああ、奴らの動力源はモーメントだからな。私がどうにかしないと…」

世界中の人々を虐殺する恐怖の機械兵士。

その動力源は遊星歯車によく似た性質を持つ、遊星粒子を効率良く制御する、装置、モーメントだった。

生みの親である彼の父親は、自分が作り上げた技術で人が殺されていくのが許せないのだろう。

毎日寝る間を惜しんで解決策を探し続けていた。

「クロウ君の調子はどうだい？」

「…アキによれば、何とか全治は可能らしい」

「マーカーの方は？」

「…完成した。もう終わっている」

父親は、安心した笑顔で「そうか」と言うと、椅子に背も垂れた。

だが、何故か顔は此方を向けずに視線だけを送っている。

何事かと訝しげに思うと、父さんはハハハッと、乾いた笑顔をした。

「お前は本当に母さんに似ているな」

「…母さんに？」

俺の母さんは俺を産んですぐに、昔の医療では治せない流行り病で亡くなっただけらしい。

写真でしか母親の顔を見た事が無い俺にとって、その言葉は意味不明だった。

自分自身で言うのもなんだが、俺は父さん似だと思っただけだ。

顔のパーツや髪型も、瓜二つ。

「顔ではなく、性格がな…本当にそっくりだよ…」

「…性格？」

「母さんは私と違って、あまり笑わない人だったんだ」

視線はそのまま俺に向けられているが、俺を見ていない事は一目瞭然。

遠くを見ているとでも言うのだろうか。

その目は今までに無いくらい優しく、愛おしんでいるのがよく分かる。

しかし、父さんの言葉に俺は更に信じられなかった。

写真で見た母さんは、とても綺麗で明るい笑顔をしている。

その母さんが俺と同じ、あまり笑わない人だったとは思えなかった。

「信じないのも無理は無い。だが、普段はクールで無愛想な母さんに私が惚れたのも、あの笑顔を一瞬だけ見たせいだからのだからな……」

女性でクールかつ無愛想な人間とはなかなか想像しえないが、父の表情から嘘であるという事は無いのだろう。

会話は終わったと思い、俺は部屋に戻る為に立ち上がると……父さんがやけにキラキラした笑顔で俺の肩に手を置いた。

「まあ、待ちなさい。まだまだお前には、私と母さんの馴れ初めも聞いて欲しいんだ」

「……………」

別段、断る事でも無い上に興味も有ったので黙って頷いたが……この行動がすぐに間違いであったと気づく。

軽い惚気ならば耐えられると思ったが、軽い物で澄まなかった。

なんと出逢いは中学から。

転校してきた母さんに先ほど言ったよう、一目惚れした父さんは熱烈な告白をしたらしい。

一撃で叩き潰されたようだが……。

だが其処から凄まじい。

1日事である、1日事に父さんは母さんに告白するという最早ストーカーの域に達しているのではないかと思うぐらい熱烈すぎている。そして聞いている俺は、それを細かく、1日事の出来事を聞かされているのだ。

1時間等生ぬるい、すでに8時間は延々と続く重い惚気は、俺に胸がムカムカする程の打撃を与える、砂糖の攻撃だった…。

7話 苦い砂糖、甘い珈琲（後書き）

前回は暗い話だったので、今回は明るい感じに。

個人意見だけど、仲良し3人組で一番気が弱そうなのはアリサちゃんだと思う。

ほら、くぎゅうの声のおかげでそんな風に思う事ない？

ルイズとかシャナとかアリアとか。

結構泣き虫な感じ。

ルイズコピペ、遊星バージョン書くくらい大好きです。

はやての家に住みついた遊星さんだけど、アツサリしすぎていないか不安です。

一応、遊星さんは傷の舐め合いか、同情か悩んでいるけど、無自覚の親切で単純にはやてを助けたいだけなんですよね。

後、マセてる幼女ってエロいと思う。

自分が遊星さんの立場だったらモッコリー！と言いながら飛び交っているよ。

因みにお風呂の話し、調子に乗っていたら入浴シーンまで書いてい

て、気がついたら“オパンポン”とか“肉棒”とか卑猥な単語を使
つていて、はやてと遊星さんがにやんにやんしていたツス。H A H
A H A H A !

ふいー、訂正が大変だったなあ。

一応言っておきますが、はやてと遊星はにやんにやんしてないです
お。

普通に洗ってあげただけだお。

オパンポンって何？と思っても、絶対に人に聞いてはならないお！

ネットで調べよう、お兄さんとの約束だお！

最後に不動博士。

子供は父親と母親を二つに足して割ったと単純に考えると、外見が
父親似なら、性格は母親似に違いないと思ったから。

最近ハイレム物が多いけど、普通に考えれば1人の女性を愛する
男の方が格好いいよね…。

というか後書きなげえ。

追伸

最近息子が元気ない…。

あ、息子は息子でも、股関についている息子だからry..。

8話 切れる指、切れない電気（前書き）

クマクマクマ、ククマー。

ククマーククマークマクマクマクマークマークマークマクマクマク
マークマクマクマクマ！

クマー？

クマー——！！！！！！

8話 切れる指、切れない電気

なのは side

「おかえり、なのは」

日が沈みかけた夕方、今日は何も起きずに無事家に帰りついた私を部屋で出迎えてくれたのは、フェレットのユーノ君だった。

怪我也疲れもすっかり無くなったようで元気な様子を見せてくれる。

学校にいる間、念話と呼ばれる便利な魔法のおかげでユーノ君から一通りの説明を聞いた私は、ユーノ君の為にあの綺麗な宝石、ジユエル・シードを集める事を決意した。

初めは遊星さんを助ける為だったんだけど、ユーノ君も本当に困っているし、私の力が役に立つなら率先して手伝いたい。

「なのは、実は大事な話があるんだ…」

突然ユーノ君が声質を落として話しかける。

フェレットなのに表情から言うべきか止めるべきか、迷っているのがよくわかった。

「どうしたの？」

「実は遊星さんの事なんだけど…」

途端に何か、不安な予感が私の中から湧き上がってくる。

お兄ちゃんの時もあつたし、もしかしたらユーノ君も遊星さんに対して勝手に危険視しているかもしれない。

「遊星さんは悪い人じゃ…」

「わかつているよ」

私の言葉を最後まで聞かずに遮る。

顔の表情も穏やかな物に変わっていて、私を安心させてくれた。

「例え勝てない相手にも、なのはを助ける為に自分を危険に晒す人だ、悪い人じゃない事はわかるよ。とんでもない無茶だけどね」

最後に苦笑を交えた言い方は、どれだけユーノ君が遊星さんに気を許しているのかわかりと分かる。

「だけど、僕にはどうしても心配でならないんだ。遊星さんが何故

動物病院に居たのか…」

動物病院…。

あのジュエル・シードから生まれた黒い怪物が襲った場所。

でも何故？

それだけでユーノ君が心配になるような事がどこに有ったのだろう。偶然、其処を通りかかってしまったかもしれないし、あれだけの破

壊音が住宅街に響いていたのだ。
誰が駆けつけてもおかしくない。

そう思った瞬間、私は引っかかりを感じた。

誰が駆けつけてもおかしくない、おかしくなかった筈。
それなのに何故、遊星さんしかいなかったの？

私が表情を変えた様子をずっと見ていたユーノ君は、すぐに何を考
えているのかわかったようで、顔を引き締めて頷いた。

「実はあの時、病院から数十メートルの範囲で封時結界を張ってい
たんだ」

「封時結界？」

すくりと姿勢を正してコホンと軽く咳払いするユーノ君。
可愛らしい姿で学校の先生みたいにわかりやすく説明してくれた。

封時結界は魔法の定番とも言える結界魔法の一つで、通常空間から
特定の空間を切りとり、時間信号をズラす魔法との事。

私が病院についた瞬間、周りの景色の色が変わったのは、結界のせ
い。

魔法効果を更にわかりやすく言うと、術者（ユーノ君）が許可した
者（私）と、結界内を視認・結界内に進入する魔法を持つ者以外に
は結界内で起こっていることの認識や内部への進入も出来ない。

つまり遊星さんがあの場所にいる事自体、普通じゃなかったという

事になるのだ…。

「僕は最初、遊星さんが魔法使いかと思って、なのはを逃がす事に何も言わなかったんだけど…」

そういえば遊星さんが怪物にやられた時、ユーノ君は凄く驚いていたっけ。

「一般人なのにどうして封時結界の中に居られたのか、それがとても不安で仕方ないんだ…」

何か偶然が揃って、可能だったのかな…。

それとも…。

遊星さん自身が無意識で魔法効果を無効にした？

考えれば考える程わからなくなってくる。

楽観的に思えばどうせ遊星さんに聞くか、詳しく調べればわかるかもしれないと思うが…。

何か嫌な予感ばかりが私の中を渦巻いていて、ユーノ君も私も、この問題に関して軽く見る事は出来なかった。

遊星 side

「うう、乙女の純情を汚された…」

「……………」

よよよと、臭い演技をしながら嘆いているはやて。

勘違いしては困るが、俺は彼女を普通に洗ってあげただけであり、手を出していない。

だが、もしかしたらはやて自身にとっては、かなり嫌だったかもしれない。

精神は老人だが、肉体は青年だ。

いくら自分は大丈夫だとしても思春期に入りかけている彼女と肌を晒し合うのは、もはや老害とも言える。

という事であるべく真剣身が伝わるように真顔ではやてに、弁解した。

「…安心しろ、俺はお前の裸を見て何も感じない」

「……………」

何故、余計に悲しそうな顔をする。

「やっぱり乳や、胸が無いと男は欲情しないんや」

…それ以前の問題だ。

お前まだ9才なうえに、俺もそんな年ではない。

「よし、だったら今日は、牛乳をぎょーさん入れたカボチャスープも作らな」

気持ちを切り替えたはやては、真剣な表情で台所に向かう。

「遊星、晩御飯はちゃんと食べなあかんよ」

冷蔵庫を開けながら俺に話しかけてくるが、やはり今の俺にはそれ程の食欲は無かった。

しかし、これからは少しの間とは言え共に過ごす事になるのだ。互いに顔は合わせるのも常に当たり前なうえ、食事など尚更。自分が食べている時に、別の誰かが食欲が無いからと言って食事を与えないのは、自分自身気持ちが良い物ではないだろう。

むしろはやて自身さえ食欲を無くしてしまうはずだ。

俺に断るといふ、選択は全く無い。

必然的に頷く以外、返事の仕方がなかった。

「…俺も手伝おう」

ソファアールから立ち上がり台所に向かうが、ここで大事な事を思い出した。

「遊星、料理出来るん？」

そう、俺は料理が全く出来ない。

老人の頃は機械に殆ど任せていた上に、若い頃はアキや龍可がいた。料理をしてくれる者に困っていないので、俺自身の経験は0だが、とりあえず食材を切るのだけはやってみた。

カボチャをまな板に置き、当てずっぽうに切り分ける。

「お、なんや。ちゃんと出来とるやないか」

どうやら手作業が得意な事が幸をそうしたらしい。

普段料理をしているはやてから、なかなかの高評価をいただいた。

年配ながら久し振りに誉められるというのは気分が凄く良い。

調子に乗って、固い皮を薄くスライスしていると力加減を間違えて指を浅く切ってしまった。

「あ、ちょっと待ってな」

はやては血が滴る俺の指を見て特に驚かず、冷静に救急箱を取りに行った。

膝にちょこんと箱を置いた姿で戻ってきたはやては、慣れた手つきで消毒、包帯をテキパキと巻いていく。

俺は…。

私は何も言えなかった。

その健気な姿が彼女に映ってしまい。

自由な片手で、何度も、何度も、目をこすり続けていた。

「はい、もう大丈夫や!」

『はい、もう大丈夫だよ』

ああ…。

「…ありがとう、龍可……」

「？」

不思議そうな顔をしたはやてを見て、正気に戻る。
俺は何をやっているんだ。

「…いや、何でも無い」

本当に何でも無い事を取り繕うとする為に、再びカボチャに向き合う。

だが何故かはやては、そんな俺を無表情でジーツと見つめていた。
時間にして三十秒程か。

やがて何を思ったか、にやりと女の子らしくない表情を『作る』と
関西に住む、夫人達のような口調で話しかけてきた。

「なんやなんやあ、もしかして私が昔の女に見えていたん？いけな
いなあ、麗しい乙女をそんな欲望にまみれた目で見てはるなんて」

「……………」

心の中で密かに、しまったと嘆く。

この子の観察力は並み外れている上に、思考力も高い。
あの一瞬で俺の弱みを握り、ジワジワと追い詰めてきた。

「それともアレか、私をそないな風に見たって事は、遊星の女は私
と年が変わらへんの？」

「…い、いや…そんな事は…」

自分でも何故か分からない事に、思わずドキリとしてしまい、声
どもる。

確かに彼女とは年がかなり離れていたが、はやて程では無い…等。
だが、はやての言っている通りだとしたら、俺ははやてをそんな風
に見ている事になる…のか？

「ロリコンさんやな。私もいつか、その子みたいに知らず知らず調
教されて、あーんな事や、こーんな事を…」

「…ち、違う！俺はそんな事…！」

「無自覚って事もありえるなあ…」

「…無自覚？」

「自分ではそのつもりが無いのに、いつの間にか体を見せ合っても
大丈夫なくらいな関係になり、気づけば合わさって、もとい、合体
して…」

「…そんな馬鹿な………」

あまりにも話しが跳躍したので、思わず否定した。

そう、そんな事が起きるわけがない。

俺だって必ず気づくさ。

「でもお風呂に無理やり入れた」

次の瞬間。

俺ははやてのトドメの言葉に愕然とし、カボチャをまな板の上に落として膝をついた。

「よう、遊星！」

後ろから陽気な声で話しかけられ振り返ると、いつもヘアバンドでオレンジの髪を逆立たせている友人が、珍しく下ろした姿で近づいてきた。

「…クロウか」

まだ怪我は完治していない為、体のあちこちに薄汚れている包帯が見え隠れしている。

だが松葉杖を必要としていないのは、やはりアキが言った通り回復は順調なのだろう。

「ツたく、ずーっとベッドで寝そべっていたせいか、体中が痛くてたまんねえよ」

「…それは怪我のせいではないのか」

「……………」

今頃気づいたのか。

「…早く病室に戻った方がいい、子供達が心配するぞ」

「うげ」

子供達と言っても、実際にクロウの子ではない。

この世の中、数多くの子供達は親と離れ離れになる事は少なくなく、身よりが亡くなった子は数え切れない程いるのだ。

元来の性格故か、クロウはそんな子供達を拾ってきたては、親替わりとして育てている。

「アイツら、トイレ行くにも風呂に入るにも着いてこようとすから大変なんだよ…」

「…それだけ愛されているんだ」

もつとも、クロウ自身が深い愛情を注がなければそこまで愛される事は無かったとも言えるがな。

「アイツら酷いんだぜ。俺のメーカーだらけの顔を見て、前よりマシになったとか言いやがる！」

この言葉を聞いて、俺は少し驚いた。

他の者に見れば、忌み嫌われるメーカーを顔中を刻み込まれているというのに、クロウは全く気にしている様子はない。

「…大丈夫なのか、その、マーカーは……」

「発信機機能自体は遊星のおかげで大丈夫さ。だけどそれ以上に許せねえのは、こんな顔じゃ女にモテなくなる事なんだよッ！」

「……………」

俺は思わず口元だけで笑ってしまう。

常にポジティブな性格をしているクロウは、こんな事で挫けない。むしろそれを糧にして更に前へ進む人間だと、改めて気づかされ嬉しかった。

「アイツらにもこの事言つたらよ、じゃあ私達がクロウの彼女になるッ！つてとんでもない事を大声で言いながら騒ぎ立てるし……」

もはや、親子の愛を超えている……。

だがクロウの口振りからして、本人はその事に気づいていないのは間違いなかった。

「遊星、俺このままじゃロリコン扱いにされちまう。どうすれば良い！」

どうすれば良いと言われてもそんな事、例え十人に聞いても十人が同じように答えるに決まっている。

「…あの子達を彼女にすれば良い」

「おいしいいい!?!」

必死な形相で俺に掴みかかってくるクロウだが、その直後、後ろから本人が会いたくないであろう人物達が、そろそろとクロウに気づかれないように近づいてくる。

無論、俺の方から見ればすぐにわかるので人物達と目が合うと、軽く『アイコンタクト』をとった。

「ちくしょう、お前は良いよな。アキや龍可が……っておい、何故俺が動かないように掴むんだ？」

「…悪く思うなよ」

「は？」「クロウ、捕まえたあ！」「…お、お前ら！？」

子供達がクロウの後ろから両脚、背中、腹、肩をがっしりと捕まえ、逃げられないようにする。

「遊星！てめえ、よくもお！」

俺はちゃんと言ったからな。

悪く思うなよ、と…。

そもそもその子供達を心配させるお前が悪い。

「ほら、ちゃんと休まないと！」

「そーだよ！」

「わ、わかった、わかった……」

顔では思いつきり嫌な顔をしているクロウだが、どう見ても足取りが軽いのは目に見えていた。

その姿を見て、俺は凄く幸せを感じる。

こんな廃墟だからの世界にある、幸せ。

作り出される小さな幸せ。

戦いに疲れる事があるが、それを実感するだけで、がぜんやる気が湧いてくる。

俺達は負けない。

絶対に世界を平和にして、クロウと子供達が何時までも幸せに暮らせるようにしてあげなければならない。

とりあえず今は、先ほど起こった出来事を誰に話そうか楽しい事を考え、歩き始めた。

爽やかな気分に含まれながら、電気が切れかけ薄暗くなった長い廊下を歩く。

ゆっくりと…。

ゆっくりと…。

廊下の電気が切れてしまう日は、まだ先……。

8話 切れる指、切れない電気（後書き）

始まりは遊星についての謎を考える、なのはとユーノ。

魔法使いでもないのに、結界に何故侵入出来たのか…。

毎度同じみ、謎作んの大好きな自分です。

そして2人の心配事をよそに、はやてとイチヤイチャしちゃう遊星さん。

くやがて何を思ったか、にやりと女の子らしくない表情を『作る』と関西に住む、夫人達のような口調で話しかけてきた。

『作る』という事はフリをしたという事。

はやては遊星から何かを感じとって、その上で笑顔にする為に敢えてふざけたのです。

そして料理が苦手な遊星さん。

指を切るシチュエーションは、読者との雑談から生まれたもので、本当ははやてに指をくわえさせたかったのですが、またしてもにやんにゃんに突入してしまったので、没りました。

最後にクロウ復活。

でもやっぱり苦勞人。

慕っている子供達は、アニメで出てくるあの子達と同一人物です。

例え歴史が変わっても逃れられない未来が待っており、会話の内容自体は明るい感じですが、そういう悪な意味も含めている。

これが『運命力』。

追伸

最近驚いた事。

自分の活動報告でオススメ小説バトンを改めて見たら、ヒロインが全員幼女であると今さら気づいた。

これはまだ良い。

問題は誰からも突っ込まれなかった事だッ！

もはや決定づけられているのか？

もはや見離されているのか？

どうする！どうするよ俺！

でも小説は本当にオススメ！

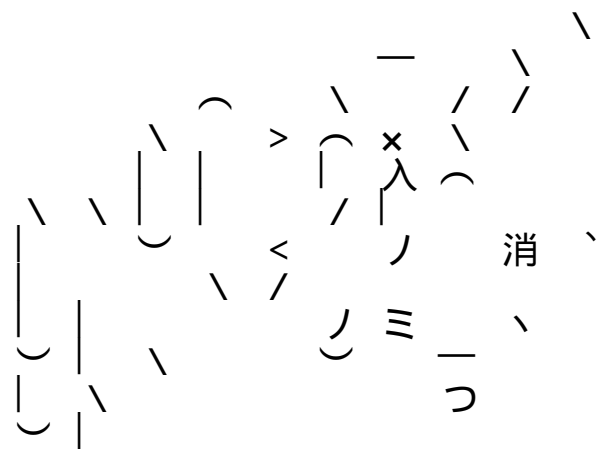
良い物を選ぶのに妥協しない私が、迷わずに選んだ一級品！是非読

んでクマ!

こんなふうに

釣られないように

読むクマよ



9話 ちよう強く抱きしめて(前書き)

ちよう強くのちようは、ちよっとという意味。

関西の方言です。(多分)

因みにボツタイトルがあり、此方は……。

『白濁液ぶはあああ!!!!』

いろんな意味でアウトー。

今回は、現代、過去、現代となります。

9話 ちょう強く抱きしめて

はやてside

真っ暗な寝室で、シングルベッドの中からもぞもぞと動き出した一人の少女。

手を可能な限り伸ばし、スタンドライトの明かりを灯すと優しい光がベッドを包む。

ねむけまなこ眠気眼をこすり、視界をはっきりさせると横に着けていた車椅子に乗り移った。

手動と違い、スピードは遥かに劣る自動式で動かすとリビングへ向かう。

単純に喉が渴いた為だ。

別に苦も無く到着し、外と同じくらい暗闇の中で冷蔵庫を開けると家電製品自体に備え付けられている光が漏れた。

すると視界の隅で影が映る。

それは全く眠っている様子は無いのに、ソファアの上で寝転がっている遊星だった。

冷たいお茶を一口含み、口の中を濡らすと彼に近づく。

「どっしたん？」

「……………」

おかしい事に返事は無い。

始め、自分の声が小さかったせいだと思い、今度は日常の会話レベルで話しかけたが、またしても返事は無かった。

いや、正確に言うと私の声が聞こえていないように見える。

何やら虚空を見つめて口が僅かに動き、ブツブツと呟いていた。

耳を澄まし聞いてみると、何やらわからない、ワカリマセン、わからない、ワカリマセンと繰り返して此方の不安を煽る。

そして時折、誰かの名前を呼んでいた。

何度も何度も何度も……。

やがて漸く私の存在に気づいたのか、ハツとした表情で此方を向いた。

「…はやてか」

その声はさっきとは打って変わり、いつもの優しい遊星自身に戻っている。

「眠れへんの？」

私もなるべく、いつもの感じで話しかける。

遊星はちよつと不思議そうな顔をしながら、一言のように呟いた。

「…最近になって、毎日眠れなくてな」

特に本人は大して気にしていないようで、言い終わると私を横目で見て、微かに笑った。

でも、これが本当にいつもの遊星なのだろうか？
色々と底の知らない彼だ、もしかしたら演技だったのかもしれない。
先ほどの方が本当の遊星？

そう思うと自分が嫌になった。

彼を気にいって家に招き入れたというのに、何か不安要素が起これば近づき辛くなる。

ぐらついた思いに嫌悪感が湧く。

だから…。

「抱っこ、して」

「…え」

両手を伸ばして、遊星にお願いする。

彼は私の行動に目を丸くし、意味を図りかねているようだ。

「私も眠れへんから、一緒にお喋りでもしよう？」

嘘では無い。

実際に遊星のあんな姿を見てしまえば眠気など一気に飛んでしまい、再びベッドに潜ろうものなら朝方までモンモンとしてしまうだろう。そして何より、話しをする事で遊星をより理解する事が出来るからだ。

普通なら会話など、時間をかけてすれば良いと思うかもしれないが、私は焦っていた。

遊星は何より今まで私との接触を避けている、今でこそ共に住む事が出来たが、いつかきつと、突然私の前から消えてしまつかもしれない…そんな予感してならないのだ。

もつと私は知るべきである、遊星の事を。

それに、思い立ったが吉日という言葉もある。
けて向こう見ずな行動ではない。

遊星は私のお願いに素直に応じてくれて、車椅子から持ち上げると、
後ろから抱きしめるような形で抱っこしてくれた。

「…じゃあ、なんの話しをしたい」

耳元に年相応とは思えないほど落ち着いた雰囲気の声で話し始めた
遊星。

今更気づいたが実はこの体勢、とんでもなく恥ずかしい。

遊星の方からしてみれば至近距離で私の髪の毛の匂いや、私のうなじの
匂いや、私の耳の裏の匂いまでわかってしまうのだ。

「えっ…と、その…あの…」

これはマズい、ホンマにアカン。

恥ずかしすぎて心臓は既にバクバク、遊星から見えないとはいえ、
顔は真っ赤に違いない。

何を喋るべきだったか、すっかり頭の中から内容が消えてしまう。

「……………」

遊星がそんな私を見て横から覗き込んでいるのがわかる。
微かに笑う声が聞こえると、より一層私を強く抱きしめた。

「…なら、俺の話しを少ししよっか」

「うん…」

もしかしたらまた聞けず終いになるかと思っただが、何故か遊星は機嫌が良いらしい。

声質の艶が若干楽しんでる物に変わっており、自分の事について話し始めた。

それはまるで、父親が自分の愛娘に絵本を読み聞かせるような語り口で、とても心が温まる。

話しの内容もまさにおとぎ話のよう。

始めは只のバイク好きだった普通の学生。

だけどある日突然、世界を巡る戦いに選ばれて嘆き、苦しみ、大切な人達を失いながらも戦い続けたいらしい。

同時に共に戦う仲間を増やしていき、最後には冥界の王と呼ばれる怪物を倒して世界を救った。

そして失った人達も取り戻した遊星は、仲間と一緒にバイクの世界レースに出場。

「……見事優勝して、いつまでも平和に暮らしましたとさ…お終い」

本当におとぎ話のような締めだった。

見れば外は少し明るくなり、朝を迎え始めている。

遊星はお終いと言っただが、私は最後まで少し納得出来なかった。

この話しはこれで終わりなわけがない。

現に遊星は此処にいる。

その仲間とはどうしたのだろう。

「その後はどうしたん？」

「…別に何も無かった」

顔を遊星に向けて聞いてみるが、表情は優しく、声も穏やかで人辺りの良い雰囲気だった。

違う、むしろこれはおかしい。

彼はいつも、無表情で無機質な声をしている。

逆にこれは彼の表情でも声でもない。
すぐにわかる、演技だ。

「絶対、ウソやな」

「…ハハッ、よくわかったな。確かにその通り“全部”嘘だ」

「ええー」

「…こんなファンタジーな話し、本当にあると思ったか」

意地悪そうな笑みを浮かべて私をからかう。

「子供をイジめるなんて、酷い人や」

「…そう、俺は悪い人だ」

本当に酷い。

嘘をついて本当の話しを無かった事にするなんて。

自分を蔑みして、悪者ぶって、心を開かない。

私の心配を無碍にして、本当に大切な事を忘れている。

「…俺はずっと一人だったただけだ。だからあそこで暮らしていた」

「なるほどなあ」

また嘘だ。

「遊星」

「…なんだ」

「ちよう、強く抱きしめて」

「…ああ」

私の言う通り、ちよっとだけ腕の力を強くした。

でも……。

「もう少し」

「…ああ」

まだ足りない。

包容力自体は強いのに、まだ遊星が消えてしまいそうな感覚がして
ならない。

「もっと」

「…ああ」

もっと、もっと、もっと、もっと強く、離れないように…。

「大変だよ、遊星！」

カンカンと鉄板で出来た床を駆けて来た龍亞。

体格は俺と同じまで成長したが、やはりまだ顔のどこかに少年のようなあどけなさが残されている。

その顔を焦りでいっぱいにした様子で俺の下へやってきた。

「…機械兵士か？」

龍亞を落ち着かせる為なるべく平静を装い、Dホイールに乗り込む準備をすぐさま行う。

いくら此処が優れたアジトだとしても、いつかは必ずバレる。

今のところ、龍亞の報告以外異常は無いと聞いたが…。

「違うよ、鬼柳が戻ってきたんだ！」

「…何!？」

「よお、久しぶりだな。お前達」

世界が混乱して以来、サティスファクションタウンとは一切の連絡が取れなくなり鬼柳の消息は不明だったが、本人は至って掠り傷一つなく、只さえ伸ばしていた髪を腰まで伸ばした姿で再会した。

「俺を誰だと思ってやがる、チームサティスファクションのリーダーだぜ？」

ニヤリと自信満々に自負する俺達のリーダー。

流石というべきか、昔からそのカリスマ性と衰えない実戦経験が物を言うのだろう。

機械兵士達に街が襲われても一致団結の力で撃退しているらしい。

「…是非とも、お前には此処に残って欲しいと思うな」

「何言つてやがる。此処にはもう、メンバーが3人も居るんだぜ。俺がいなくても大丈夫だ」

それもそうかもしれない。

現に次々と襲われている人達もいるというのに、俺達には今だ大きな被害は無い。

苦しい事には変わり無いが、俺達は幸せな方だ。

「…ところで、今日はどうした」

鬼柳が街を開けてまでわざわざ此処まで来たのだ。

何か大事な理由があると思うが…。

「実はな、お前に会わせて欲しいと言ってるお嬢様を連れてきたんだ」

「…お嬢様？」

「それもかなりセレブだぜ」

俺自身の社会階級などたかがしれている。

科学者としてそれなりに地位があった父さんならばまだわかるが、そのような高貴な方が俺に会いくる理由がわからなかった。

「入んな」

鬼柳の言葉と共に扉が開く。

まず最初に目に入ったのは、絹のように滑らかな光沢を放つ長いブルンドの髪。

スラリと細く長い足を優雅かつ野性的な動きで進めると、ライダースーツで身を包んだ美しい女性が現れる。

「初めまして、不動 遊星」

その声さえも美しい。

女性はどこか、誘うような視線を俺に向けながら楽しそうに名を語る。

「私はシェリー・ルブラン。あなたを奪いに来たわ」

どうやらこのお嬢様はお淑やかなタイプではなく、かなり過激な思

考をしているらしい。
後にアキと龍可がどのような顔をするか不安になり、背中から冷や汗を垂らしてしまった。

トントンと、小気味の良い音がLDKの室内に響きわたる。
勿論、家の主であるはやてが台所で朝食を作っているからだ。
共にいた遊星は1人、ソファーに座りながら対象に力チャ力チャと音を立てている。

手に持っているのは銀色の鋭いフォルムをした精密機械。
はやてに一体何の機械なのか訪ねられた時は、返答に困ったが……と
りあえず完成してからののお楽しみだと伝えたら納得してくれた。

しかしこんな物、完成したところで意味があるわけではない。

カードは1枚も持ってない上に、実体化させる能力も無い。
せいぜい盾になるくらいにしか役に立たない物だが、それでも俺は
これを再び手にしたかった。

もう殆ど完成し、約200ぶりに左腕に装着してみる。
最早これは俺にとって体の一部分みたいな物だったのか、自分でも驚
くほど馴染んでいるのがわかった。

電源を只の電気に行っている為稼働時間はかなり制限されるが、これ

で良かったと思う。

本来なら遊星粒子を生み出すのに必要不可欠な遊星歯車があれば、モーメントを使う事が出来る。

しかし、未来を破滅に導いたのが人々の意志だとしても、やはりモーメントは危険な物だ。

あのような二の舞を此処で起こされる可能性がある。

運命の意志……とは言いたくないが、あの時遊星歯車を落としたのは本当に良かったのだ。

その変わり…。

もう一人の不動 遊星のように『新たなる可能性』を手に入れる事は無くなるだろう。

こんな事、不動 遊星に言ってしまうえば再び怒りを買うのを間違いないが、今の俺にははやてがいる。

不動 遊星になりたい為と今度こそ…という思いもあるが、純粹にこの子守りたい。

只それだけの気持ちがある今の俺を突き動かしているのだ。

「遊星、ご飯出来たで」

せめてこの子の病気が治って一人で歩けるようになるまで…。精神面でも肉体系でも支えてあげよう。

その為にまずは、職を探さなければならぬ。

「…今日のご飯も美味しそうだな」

食事をテーブルに並べ終わると、はやてを抱えて椅子に座らせる。俺も席について、いただきますの挨拶を済ませると、始めにミルクを口に含ませた。

「遊星、明日から一緒にベッドに寝ようなあ」

この一言で床がミルクまみれになったのは、言うまでもない。

昼過ぎ、はやてが通っている病院に行くと言っているので俺もついていく事にした。

何故か始めは俺がついていく事にはやては渋っていたが、俺がどうしても伝えるとなかなか動かなかった頭を頷いてくれた。

やはりはやてを見守っていく為にはこの子自身の病気について詳しく知る必要がある、主治医とはよく話し合うべきだと思った。それに俺には大した力は無いが、豊富な知識は残っている。

伊達に長生きしたわけではない。

更に俺の世界の医療技術もこの世界よりは遥かに発達している。

かつて契約により、タイムマシンであるインフィニティやコピーの人格を移した人造人間さえも作り出せる時械神達の知識も得ているのだ。

必ず治せる。

より一層決意を固め、車椅子を押し、病院の入口に入った。だが、何やら周りの様子がおかしい。

何故か俺の姿をチラチラと見ては、近くにいる人達と小さな声でソソソと話していた。

因みに俺の格好は、はやてから亡くなったお父さんの服を借りている。

何でも俺の服装はかなり目立つらしく、色々と危ないらしい。

特に断る理由も無いので素直に言う事を聞いたが……全く似合っていないのか、ほっておけばいつまでも続く程、人々の声は止まない。

「はやてちゃん」

「こんにちは、先生」

突然、奥の方からはやての名前を呼ぶ声が聞こえ其方を見ると、人当たりの良さそうな笑みを浮かべるショートカットのお嬢さんがやってきた。

どうやらこの人が主治医らしい。

外見からして20代後半か30代前半辺りだろう。

この世界の基準は少し違うかもしれないが、やはりこの若さで脚の不自由な子供の主治医を任されるのだからかなり優秀な人に違いない。

「君は？」

彼女は俺の姿を見て一瞬驚いた顔をしたが、すぐに元に戻し、名前を訪ねる。

「俺の名前は不動 遊星と言います。はやてとは遠い親戚です」

「親戚？」

はやてに頼まれたのは服装の事だけではない。
事前に彼女には遠い親戚だと言ってほしいとも言われた。

これに関しては当然である為、疑問も無く聞いた。
誰だってそうだろう。

ある日突然、見知らぬ男を連れてきたとなれば面倒を見ている病院側は黙っていない。

問題は嘘が通じるかどうかだが、この病院でははやてはなかなか好かれていたらしいのか、主治医は何の疑いもなく信じてくれた。

此方としてはあまり気持ちの良い物ではない。

特にははやてに嘘をつかせてしまったという罪悪感、俺の中でかなり“くる”。

早速はやては主治医に医務室に連れていかれ、俺も一緒に後を続く。

しかし…。

「君は此処に残って」

意外な事に一緒に同伴する許可を貰えず、医務室前廊下にある、長椅子に少しの間待機する事になった。

「先生、ありがとうございます」

時間にして約30分程か、はやての挨拶がドア越しから聞こえるのを確認すると立ち上がる。

「あ、遊星」

「…お疲れ」

部屋から出てきたはやては俺を見つけるとすぐに笑顔になり、車椅子を一生懸命動かして近づいてきた。

「…ほら、ゆっくりでいいから」

「うん！」

見守る此方としてはこれだけでもかなり肝を冷やす。はやては基本的にのんびりした子だが、偶に俺の予想を超える行動や言動を行うので、本当に目が離せない。

「遊星、先生が呼んでたで」

ある程度は予想出来たが、彼女は二人つきりで話しがたいらしい。俺に関する事か、それともはやての脚に関する事か、どちらか…。

「…失礼します」

一応ノックをし、俺が部屋に入る事を伝える。

中からくぐもった声で返事がき、軽く深呼吸をすると中に入った。

「適当に座って」

お辞儀をし、とりあえず一番近くにあった回転椅子に座ると、主治医は真剣な目つきで俺を見た。まさに品定めといったところか、此方に不審な動きがあればすぐにでも警備員を呼びそうな勢いである。

「…言いたい事はわかります」

「そう、なら話が早くて助かるわ。君は…はやてちゃんをどう思っているのかしら？」

これはまた、随分範囲の広い質問だ。逆になんと答えて良いのかわからない。俺にとつてのはやてか……。

「…娘、といったところでしょうか」

若干躊躇ったが、これしか思いつかない。はやてに対する俺の思いは、始めて会った時から今まで、一度も変わった事がないのだ。正確には孫と言いたかったが、流石にそれでは相手が納得出来ないので、この辺りが妥当だろう。

「なるほどねえ」

主治医は何故か、厳しい視線からニヤニヤした物に変える。片手は口元を隠す為に持っていき、グフフと笑っていた。

隠す気無いだろ。

「…それで、俺の疑いは晴れましたか」

「ああ、それ？さっき君が悩んだ瞬間に解決したわ」

「…は？」

あまりにもアツサリしすぎて自分でも驚く程まぬけな声が漏れる。

「君、はやてちゃんに対する思いを真剣に考えたでしょう？逆にすぐに答えたらますます疑っていたわ」

なるほど、そういう事か…。

幾らはやてが安全だと言ったとしても、保護者…この場合俺だが、無理やり言う事を聞かせている可能性もある。

これは彼女に質問される前に一応予想出来ていたが、たった一言の質問でそれがわかってしまうとは思わなかった。

俺が彼女の質問に対してすぐさま答えたとしよう、しかしその場合、答えを既に用意していた事になる。

この時点で彼女は俺を疑うのだ。

「最近はやけに知恵の働く人もいてね、始めはよく騙されていたわ

…」

全くもって嫌な話である。

親が子に“過剰”な暴力を振るう、そんな悲劇が起こっているのだ。

「それに、はやてちゃんと少し話して、なんとなく君が真つ当な人であるとは気付いていたの」

「…是非とも聞いてみたい内容ですね」

「それは無理ね。はやてちゃんに口止めされているもの」

一体、何を言ったんだ。

気になって仕方ないが、本人は言う気が全くないらしい。

相手の聞きたい事は終わり、今度は俺が知りたくて堪らなかった事を聞いてみた。

無論、はやての足についてである。

彼女に俺が医療にある程度知識がある事を伝え、カルテを見せてもらう。

だがそこに書かれていた事は、俺の予想を遥かに上回っていた内容だった。

「…これは、どういう事なんだ」

空欄だらけ、或いは不明の二文字だけしか書いていないのである。筋ジストロフィーの一種だと思っていたが、こんな…有り得ない。

「ごめんなさい。医者私が言うのもなんだけど、本当に原因はわからないの…」

更に詳しく話しを聞くと、やはり筋ジストロフィーに似た性質を持っているらしい。

だが問題は、この世界では筋ジストロフィーに対する治療方は見つかっているが、はやて自身にそれを行ってもまるで意味がない事なのである。

それどころか進行は更に進み、症状は悪化。

来年に入る前には呼吸器系や心臓の筋力さえも力を失いたないかもしれないのだ。 保

来年に入る前、たった、たった一年しか、はやては生きられない。

いつだってどんな時だって世界はそうだ。

生きていかなければならない者、生きたい奴は早死し、逝くべき者、逝きたい奴は何時までも経っても逝く事が出来ない。

無条理で非情で、不公平である。

また、喉から血が吹き出る程、泣き叫びたかった…。

「後、私から言いたい事は一つだけ」

その後彼女から、一緒にはやてと過ごしていくなかで、一番に大切にしてほしい事を頼まれた。

内容は俺にとって悩みの種であった、性に関する話しである。

中には納得いく物があれば、驚愕して信じられない物があるのもあった。

「一つは彼女がもう9才を越えているという事。わかりやすく言えば既に思春期を突入している可能性があるわ」

そんな馬鹿な。

いくらなんでも既に思春期に入っているには早すぎる。

「やっぱり知らなかったようね。女の子は男の子より性に対する意識がとて早いだよ」

確かに言われてみれば、思い当たる節は多くある。

はやてはやたらマセている時もあるれば、一緒に風呂に入る時も嫌がっていた。

更にははやてとは違うが、なのはも俺の裸を見て恥ずかしがってもしる。

なんと軽率な行動をとってしまったのだろう…。

「結構、やつちゃったみたいね」

俺の表情を見て悟ってくれた主治医。

しかし今朝もはやてと一緒に寝ようと言われたように、思春期とは思えない行動もとっていたのも事実だ。

ましてや俺のような赤の他人を家に入れるなど…。

「…先生、俺はどうしたら」

「んー、まあ今まで通りで大丈夫じゃない？」

主治医よ、それは答えになっていない。

何故今まで通りで良いのだ。

「だって君、はやてちゃんに好かれているでしょう？……嫌も嫌も好きの内と言っし」

最後だけ声が小さかった為殆ど聞こえなかったが、少なくともはやてに嫌われていない為、ある程度は大丈夫らしい。

「君が気づいた範囲でいいの、ちよつとの意識で大分は改善出来るわ」

なるほど、それならばとてもやりやすい。

まずは意識から、彼女のその指示はなかなか的確であり、実力を垣間見た気がする。

とりあえずは一緒に風呂に入らない事、一緒に寝ない事が大切だろう。

添い寝をしてやれない事にはやてはガツカリするかもしれないが、これもあの子為だ。

心を鬼にし、ちゃんと謝っておくべきだと思う。

「…今日はありがとうございました」

背筋を伸ばし、彼女に対して精一杯の誠意を込めてお辞儀する。

はやてはずっと一人で生きていたと思つたが、違った。

やはりどんなに強い心を持つ者だとしても、一人で生きていくのは無理なのだ。

はやてがここまでしつかりと育つたのも、彼女の存在があるからこそだろう。

女は強し、とはよく言つたものである。

結局、はやての病名を知る事も治療方法もわからなかった。

そもそも病名も原因も全くわからない為、治療のしようがないのだが…ここまで自分が役立たずになるとは思わなかった。

何時までも自分が思っている成果をあげられない事に胸の中でイライラしたが、病室の扉を開ける時にその気持ちはすぐさま無くなった。

何故なら、愛らしい笑顔でこんな俺を迎えてくれる可愛らしい少女がいるのだから……。

9話 ちょう強く抱きしめて（後書き）

どうしてアンタは、幼女の思春期に詳しいのー？

…と思っても聞いてはいけない。

決して、女の子はどの時期が調（ryゲフィン！ゲフィン！…教育しやすいのだろうと思って、研究したわけではありません。

結果的に性に対して興味を持ち始めながらも、羞恥心があまりない9才だと考えた事もないですY。

私、ただ保険体育が好きなだけアルY。

解説は特にありません。

でもわかりにくい事があったら言うてくださいね。

10話 言葉の重さ（前書き）

漸く10話にたどり着きました。

時期内容はアニメの3話に入った瞬間かな。

今回もセリフ少な目なので文章がおかしい気がする…。

あるところで「遊星い！この野郎お！」と言いたくなるところがあるのでちょっと注意を。

因みにシリアスです。

正直自分も書いていて頭を叩きつけましたが、必要な事なので勘弁してね。

10話 言葉の重さ

夜。

街灯が必要ない程、明るい光を放つ満月が天辺を過ぎている。浮かぶ雲さえ目視出来るその空は美しく澄み切っており、夜遅くだというのに、爽やかな心地よさを感じた。

彼は、不動 遊星はその空の下、浮浪者のように徘徊をしている。はやてが眠りに静まった後、自身もいつも通り“ソファー”で眠りについたが、何故どうしても目が覚めてしまい、自然と足が外へ進んでいた。

とても不思議な感覚だった。

二回目になのはと出逢ったあの夜。

黒い毬藻に襲われる前の時と同じ感覚が俺の中に渦巻いている。

引かれている、とても言うべきか…。

例えるならばシグナーの痣ととても似ている。

元はそれは、一つであった物。

何かしらの出来事でバラバラになってしまい、必死に元に戻ろうとしている。

ふと気づけば、目の前には私立聖祥大附属小学校と書かれた学校があった。

更に進む足。

しかし、僅か数歩進んだ瞬間：パツタリと俺を引き寄せせる感覚が消えてしまったのだ。

疑問だけが残り、どこか者寂しい気分だったが既に頭の中では此処にこれ以上居ても意味は無いと考えた。

回れ右をし、さっさと退散しようとした時、視界の隅に本来此処にいない筈の人物を見かける。

高町家の、なのはだ。

かなり疲れているのか、少々不思議な力が宿っているピンクの杖を持ち上げる力も無いようで、ゴリゴリと地面にこすりつけながらフラフラと歩いている。

後少して倒れそうになったその時、俺はなのはに手を伸ばして、支えるように胸の前へ手を入れる。

パークの柔らかい感触をグローブ越しに感じながら、恐らくなのは自身の体重を表しているであろうこの腕の重みが、この子の疲労を物語っていた。

「あれ……遊星さん？」

虚ろだった目を数回まばたきし、俺とこんな所で出会った事に多少

驚いているようだ。

俺はなのはの言葉をとりあえず無視し、なるべく優しい手つきで背中に背負う。

なのはからは一切抵抗は無く、なんなくと出来たが…やはりとても軽い。

腕に感じた筈の重みを全く感じる事が出来なかった。

何故なのはがこんな所にいたのか、その理由として一番可能性が高いのは、恐らくあの、不思議な宝石に関係しているからだらう

思念体と呼ばれる怪物が相手になるかもしれない上に、夜遅くまで起きている事に少なからず不安を感じ、あの時は避けていたこの子達に関わりを持つ事を僅かばかり覚悟して、事情を聞く事を決めた。

「…俺をレジスタンスのリーダーにしたいだど？」

自らをシェリーと名乗った美女をボロボロの応接間へと通し、これもまた埃にまみれた椅子を差し出したが、本人は全く動じる様子無く、常に挑発的な目線を俺だけに向け続けている。

俺自身は知らないが、このお嬢様はかなり有名な人物らしく、先ほどの応接間や椅子を利用して試しに最悪な対応をしたが、この様子ではどうやら“本物”の貴族らしい、俺の嫌いなタイプではない事はすぐにわかった。

だがしかし、常にこの俺だけを“少し変わった目”で見続けるのはどうにもくすぐったいというか、落ち着かないというべきか、嫌いではないものの苦手意識というものが沸きあがってくる。

「ええ、アナタには機械兵士達を止められる程の力があるわ」

「…シグナーとしてか？」

俺に宿る力など、それ以外に知らない。

もしそれによつてリーダーを決めるなど、無理な話だった。

所詮は地縛神との戦いの為に生み出された力、機械である奴らには意味がない事、百も承知。

痣を除けばただの人間でしかない自分をわざわざ訪ねるとは無駄足だったなど、口に出して言おうとした時、彼女はハッキリと首を横に振った。

「やはり気づいていないみたいね。シグナーとは関係なく、アナタにしか持っていない“力”があるという事に」

彼女の言葉に理解する事が出来なく、しばらくフリーズしてしまうが、シェリーはそばにいる体格が良い男に何か言う、男は鞆から一つのパソコンを取り出す。

起動させ映し出されるのは、廃墟の街をDホイールで走る俺だった。

「これは街に設置され続けていた監視カメラの映像よ」

組織を束ねる人間として情報は何よりも大切な事は知っていたが、彼女はその為にあらゆる物を集めたい、これもその1つだそう
だ。

俺はこの映像に記憶がある。

この日は危険とわかっていたものの、昔のようにただ風を感じる為にDホールを走らせていた。
特に機械兵士に出会う事もなく帰ったが、シエリーにとってはこれがとても意味があるという。

「この建物の影をよく見て…」

静まり返る応接間。

俺は彼女の言う通り、ジッと見続ける

映像に映る俺がその建物を通り過ぎた瞬間、俺は目を見開いた。

機械兵士達が俺を影から見ているのだ。

それも2つや3つの数ではない。

一体どこから現れたのだと言いたい程の小さい機械兵士達が凄まじい数で俺を見ている。

思わず背中に寒気が走ったが、驚くべき事はこれだけでは無かった。

機械兵士達は俺が通り過ぎたと見ると、静かに何事も無く去っていくのだ。

「不思議でしょう？…人間を抹殺する為の機械が何故かアナタだけ

を無視するなんて」

「…これが、俺をリーダーに選んだ理由か」

彼女は何故か悪戯めいた笑みを浮かべるとパタンとパソコンを閉じ、投げ捨てる。

「理由はこれから出来ていくわ」

再び静まり返る応接間。

どうやら俺は、ポカンとした表情しているようで、彼女のそばにいた男は額に汗をかいて苦笑いを浮かべていた。

「しばらく此処に住ませて。部屋はそうね…アナタの隣が良いかしら」

「…意味が全くわからない…」

「わからなくて良いわ。私がちゃんと教えてあげるから」

どこか含みがある言葉が気になって仕方ないが、断ると言う選択肢は無かった。

もしかしたら彼女が俺にあの映像を見せたのは、この為だったのかもしれない。

まさかな、と…。

すぐに頭を切り替えて立ち上がると部屋に案内する為に応接間の扉を開いた。

「…わかった。此処よりもずっと良い部屋に案内するよ」

「あら、嬉しい」

ユート side

「…ジュエル・シード、か……」

ユートが遊星に話した事は全て、彼がなのはに教えた事と全く同じである。

美しい青で輝く、ひし形の宝石が『願いを叶えてくれる』滅びた異世界の遺産である事。

そしてその遺産を総称して、ロストロギアと呼ばれる事。

自分自身が異世界の人間である事。

自分がジュエル・シードを発掘して、この世界に落としてしまった事、全て包み隠さず。

ユートが話した理由は2つあった。

1つは遊星がなのはの助けになってくれるかもしれないからだ。

彼自身なんの力を持たない一般人かもしれないが、あの落ち着いた

雰囲気存在はとても大きい意味がある。

なのはもユーノも、まだ十代に入ったばかりの子供。

危険な作業であるジュエル・シードの回収に例え強がったとしても、不安があるのは当然。

いざという時、心の支えは必要であった。

そして2つ目。

それは『遊星が異世界の人間』ではないのか、その疑問を解決する為である。

前になのはとの会話で、遊星に対して様々な疑問があがっていた。

何故、彼があの場合にいたのか、何故、彼が臆せず思念体に対して戦いを挑んだのか。

本来なのは世界の人間は、魔法とは無縁の筈。

どんなに精神が強い人だとしても、危険な存在にすぐに立ち向かうなど有り得ない。

『慣れ』が無ければ逃げ出してしまうのが当然だ。

なのに彼は思念体を見た瞬間、驚きでもなく、恐怖でもなく、“なるほど”という表情をしていた。

立ち向かうなど当然だと。

ポロポロにされて立ち上がるべきだと。

一般人では有り得ないほどの心の強さだった。

ユーノから聞いた話しの内容事態にさほど驚く事は無かった。

：いや、もしかしたら全く驚かなかったのかも知れない。

俺の中で気になった点は只一つ、なのはの事だけしかないのだ。

夜はちゃんと眠れているのか、危険な目には遭っていないのか、誰か他に知っている人はいないのか：頭に浮かぶのはそればかり。

状況だけにこの子助けてくれる人は今はいない。

あの、人が良い家族でさえにも話せないでいるのだ。

なのはは、寂しくないのだろうか。

眠っているなのはを起こさないようにゆっくりと進めていた足。しかし、目の前に二度見たである家の表札が現れた時、止めた。無論、なのはの家である。

面倒事を起こした後に出ていったばかりだというのに、今度は夜遅くにいたなのはを背負って現れたら、なんと言われるだろう。

人当たりの良い人達ばかりだったが、出来れば魔法に関する事はバシない方が良くも知れない。

先ほども言ったように、なのはにとっては知られた方が絶対に良いが、魔法の強い力は危険すぎる。

どこの誰が悪用するかわからない。

この世界のパワーバランスを崩壊させてしまう恐れがあるのだ。

私達のように…。

「…ユーノ、なのはの部屋に忍び込む。俺の肩に乗れ」

「わかりました」

なるべく音をたてないように壁を登り、前にながらせてもらったなのはの部屋の場所を予測して、窓を覗き込む。

女の子らしいベッドやランドセルが見え、確認すると鍵が開いている窓から入る。

ベッドに妙な膨らみがあり捲ると、丁度なのはぐらいの大きさの抱き枕が載せられていた。

カモフラージュのつもりだろう。

しっかり者のイメージがあったなのはの、子供らしい発想に口元だけで軽く笑い少し嬉しく感じる。

なのはをベッドに乗せ、髪を結んでいた2つのリボンを外す。

驚く程母親に似た顔立ちになり、将来は間違いなく美人になるになるだろうと、良い意味で期待をした。

「…じゃあな、ユーノ。なのはを頼んだ」

立ち上がり部屋から出て行こうとした時、ユーノからその小さい手で止められてしまう。

「お願いがあります。これからも今日みたいに、なのはと会っていただけませんか」

突然のお願いと向けられる真剣な眼差し。

俺もなのはを運んでいる時、この子だけでは不安だと思っていた為、誰か頼りになる人物に頼まなければならぬと思っていたが、まさか俺自身にくるとは思わなかった。

事情を知っているとはいえ、俺は何の力を持たない。

ユーノにこの事を言ってみたが、ユーノはそんな事が重要ではないと、ハッキリ言われてしまう。

只、そばにいてあげるだけでいいと…。

だが、俺は…。

「…すまない」

一言だけ告げ、逃げるように出て行く。

何故か無意味に体を走らせ、ユーノの言葉を振り切るように前に進んでいた。

息が途切れ始めても足はけして止めない。

全身に汗が噴き出しても。

やがて気づかない内に限界がきたのか、フラつき始め、とうとう盛大に倒れてしまう。

痛みは感じない。

近くで吠えている筈の犬の声もどこか別世界から響いているように聞こえ、今の自分が正常ではない事がわかった。

起き上がる力も今は無い。

ただ、寝転びながら短い息を吐き続ける事しか頭に入らない。
ゆっくりと酸素が脳に届き思考が元に戻りかけた時、俺は何故ユ
ノの頼みを断ったのか、考えた。

自分に力が無いから？

既にはやてという存在がいるから？

全く、馬鹿な事を考えたものだ。

とつくの昔に理解しているというのに、2つも違う言い訳に辿り着いたのだから。

俺が断った理解、それはただ1つ……怖いという情けない理由。

いつの間にかそばにいたはやてと違い、誰かに助けてほしいと頼まれてそばにいなければならないと、明確な言葉として聞いた瞬間、耐え難い恐怖に支配されたのだ。

失う悲しみ。

はやてと共にいて目を逸らしていた苦痛に、またしても突然としてフラッシュバックのように思い出さされ、俺は子供のように膝を抱えて丸まる。

頬に冷たくて硬いアスファルトを押し付けながら、はやての病気に
ついて考え、一体いつになったらはやてと別れてしまうのだろうか
思った。

「…ッ！」

最低最悪、屑で愚かな考えに至ってしまった自分に自己嫌悪し、力いっぱい頭を地面に叩きつける。

「…糞ッ！糞ッ！糞ッ！」

こんな事では収まらない…！
もつと、もつと！

誰でも良いからこんな俺を殺してしまえ！

額が割れ、血が僅かに滴り落ちるのが目に入るが構わない。
こんな事で許されるものではないのだから…！

更に叩きつける。

何度も何度も。

やがて頭に登っていた血が少なくなった為か、落ち着きを取り戻し、
また横になる。

こうして目を閉じれば、同じような“夢”を何度も見るのだ。

みんなが、俺に向かって「……きて」と言う。

その顔は怒っていたり、悲しんでいたりと、笑顔だったり、全く訳が
わからない。

特にジャックは怒ってばかり、龍可は泣いてばかりで、アキに至っ
ては笑ってばかりだ。

本当に…。

「…わからない」

俺をそつちへ呼んでいるのか？

でも、毎回こんな事を考えればみんな首を横に振る。

「…ワカリマセン」

所詮は寝ている自分が考えている事が夢な為、話しかけてくるのは当然みんなではない。

淡い期待を抱いた所で幻想に過ぎないのだ。

少しずつ立ち上がり、再び歩きだす。

はやてに心配かけない為に帰らねばならないが、同時にあの子にどんな顔をすればいいかわからなかった。

私はまだ、後ろに逃げる事しかできないらしい。

「風が気持ちいいわ」

次の日、朝一番からシェリーに起こされた俺は彼女をDホイールの後ろに乗せて、走っていた。

シェリーにもDホイールはあるというのに、彼女は俺と近くにいた方が安全だと一点張りで乗せて欲しいと頼んだ。

そこまで言われれば此方としては断る訳にもいかず、仕方なく了解

する。

なるべく機械兵士達が現れない場所を走るが、シェリーは俺の自由にしてほしいという。

それこそが俺の力を呼び覚ますキツカケになると自信満々に言うが…。

そんな様子は一向に訪れる事が無い。
いつもの普通すぎるライディングだ。

だが彼女の言うとおり、風はとても心地よい。

最近この辺りでは機械兵士が暴れていない為か、粉塵は殆ど舞っておらず、空気も爽やかだ。

普段は一人で見える外の景色。

でも、シェリーのこんな楽しそうな表情を見れば偶には誰かとこんな風に一緒にいる事も良いかもしれない。

そう思った瞬間、突然瓦礫の中から何かが飛び出し、俺達のDホイールにぶつかってきた。

「…ぐッ！」

バランスを失い転倒してしまった俺達は投げ出され、地面に体を叩きつける。

激痛に震える体をなんとか立ち直らせ、すぐにシェリーの無事を確認にするが…。

「…いない！」

冷や汗が一気に噴き出すのを感じながら急いで走り出す。

すると近くで金属がぶつかり合う音が響いており、其方に駆け出すと丁度シェリーが小さいタイプの機械兵士に回し蹴りを繰り出しているところだった。

あの細い足のどこに力があるのか、機械兵士の頭はひしゃげ飛び、彼女はデュエルディスクの先端から電流を流すと、それを無くなった頭の首に突き刺す。

直接電流を受けたせいかわ、機械兵士は小さなショートを断続的に起こし、やがて動きを止めた。

「…凄いな……」

思わず口から出た感想が彼女の耳に入ったのか、嬉しそうな笑顔を此方に向ける

その顔に汗などという物は浮かべていない。

「惚れたかしら？」

「…フツ」

自分の身に危険が訪れたというのに尚も毅然としたその姿勢。

“ジョーク”も交える事が出来る余裕の彼女に俺は、心に安心に似た頼もしさを感じ、新たに加わった『仲間』への証として手を差し出した。

「…是非とも俺にも教えてほしい」

「滞在が長くなってしまいわ。私、あまり歓迎されてないみたいだ

し

「…構わないさ、俺がアンタを気に入ったんだからな」

「あら、嬉しい」

10話 言葉の重さ（後書き）

リアルファイターシエリー！

原作を知らない人の為に言っておきますが、けっっっして、間違っ
ておりません。

マジで遊戯王はリアルで戦います。

後、私が頭を叩きつけたところは遊星の心の声。

はやてと別れると考えたところです。

つまりもう諦めている。

誰でも良い！私を殴って！幼女に対してこんな事を書いてしまった
私をメチャクチャにしてくれ！

うわああああ！

今回ははやてのターンだ！

でもまだ鬱が続くよ！みんな気をつけてね！

追伸

普通の客 私「いらっしやいませ」超低い声

可愛い幼女 私「はい、いらっしやーい！」超高い声

上司「アンタ、彼女いないけどまさか…」

私「え…いや違いますよ！？彼女なんて面倒臭いだけなんですって
！」

怪しまれたけど私の素晴らしい演技で乗り切りました。

…なんてな！

ゼンブウソダクマー。

11話 気づいた気持ち（前書き）

どうも皆さん久しぶりの更新ですよ。

前は現代時間で虚しい終わり方でしたが……今回も悲しい感じだよん！

でも前半のみ、終わりはいよいよ皆さんが望んでいた展開が……。

おかげでかなり難しく、納得いく物が出るまでこんなに掛かってしまった。

とりあえず、登場人物の入れ替わりが激しいので注意を。

11話 気づいた気持ち

はやて side

朝。

いつも通りの時間に起床したはやて。

朝食を作る為にリビングへ向かうと其処には既に遊星が起きており、朝日が差し込む窓から外を眺めていた。

「遊星」

近づき、此方に意識を向ける為、黒いシャツの裾を引っ張り名前を呼ぶが、何故か遊星ははやてに顔を向ける事はない。

不思議に思って更に引っ張るがやはり此方を向く事は無く、只…。

「…なんだ」

…と、思わずビクついてしまっくらい冷たい声と態度が代わりに向けられた。

「え、えっとな…ご飯、一緒に作ったらええかなあと思って……」

「…悪いが断る。朝食も必要無い」

おどおどした気持ちが現れている言葉の前にも遊星の態度は決して変わらない。

むしろ、先ほどにも増して拒絶しているのがわかる。

「で、でも…朝ご飯はちゃんと食べなアカンよ？」

はやては信じられなかった。

昨日まではあんなに優しくかった遊星が急に態度を変え、此方を見る事さえしなくなった事に。きつと、どこか具合悪いのかもしれない。その考えに至ったというのに朝食を進めるといふ、口から出る言葉と頭で考えた事が逆に出た事にはやては気づかないほど焦る。

窓に映る自分の顔が引きつっている事さえ。

「…すまない」

何がすまないなのか分からない。

朝食を断っている事なら私は気にしていない、だからいつも優しい無表情を向けて欲しい。

だが遊星は、何も言わなかった。

素早く踵を返し、そのまま黙って家から出て行く。

はやてはもう、遊星の顔を見ようとすることさえ出来ない。

ガチャンと扉が閉まる音が無情に響き、明朝の部屋は、やけに暗く感じた。

「遊星…なんでやっ」

「なのは、もう起きないと…」

「んー」

昼過ぎ、未だベッドの中で睡眠を貪っているなのは。

ユーノはその小さな体を精一杯使い、なんとかして起こそうとするが、無意味。

というよりも逆効果になってしまい、寝返りを打ったなのはの下敷きになってしまう。

なのは自身も起きなければならぬと思ってはいるものの、最近はや中遅くにジュエル・シード探しにいき睡眠を削っている。

今のところ、手に入れているジュエル・シードは4個。

ユーノが初めから持っていた1つ、なのはが初めて魔法を使い思念体を倒して手に入れた1つ、プールで手に入れた1つと昨日の夜、学校で封印したばかりの1つだけ。

手がかりの無い暗闇の中を歩き回るのは幼いなのにとって、とても精神的疲労も大きい。

戦闘では役に立つ事が少ないかもしれないが、心の中でせめて遊星がいればと…思わず甘えたい事を考えた。

でも良いか。

少しだけ休めば良い、ジュエル・シードで被害が起こる前にまた探せばいいのだから。

そう思い、再び枕に顔を埋める。

後にこの考えが間違っている事に気づかず。

自分ももっと、頑張らなければならなかったというのに……。

遊星 side

ゴミ捨て場の前を昼間の人々を通る度に遊星の背中に視線が当てられる。

姿は見ず簿らしくないというのに、やけに手慣れた様子で使える物と使えない物を素早く分けていくその手際の良さに疑問に思いながらも、不思議に感心している者もいた。

だが、遊星自身の心は上の空だ。

昨日の夜、絶対に考えてはならない事を考えてしまった自分に対しての殺意と嫌悪感は何時までたっても消えていなかった。

はやてに対しての申し訳なさ。

そればかりが自分にズシズシとのしかかり、苦しくて堪らない、話す事も、あのキラキラとした瞳をまともに見る事が出来なくなり、何かで気を紛らわしたかった。

ふと気づけば自分の横には袋に詰められた鉄屑の山が。
やってしまったと頭が痛くなる思いをし、面倒な役人に見つかる前にその場を去る。

「…全て鉄だ。一応確認してくれ」

「はいよ!」

町外れにある交換所に袋に詰められた鉄を持っていくと、人が良さそうな笑顔を浮かべて来る中年の男性が出てきた。

一瞬、俺が担いできた袋を見て驚いた顔をしたが、すぐに表情を切り替えて計りに案内する。

「うーん、ピッタリ40kg。中身も全て鉄。お兄さん良い仕事するねえ」

「…kg数いくらだ」

「今は44円だよ」

1760円か、まあ…悪くないな。

手渡して差し出された僅かばかりの金。

だが、俺の記憶の中でこんな物は、まだマシな方だと言える。

生きていくのに誰もが必死だったあの頃は、金が絶対的に必要にな

り、大金から雀の涙程しかない小銭でさえ、人々は奪う為に争っていた。

今でも覚えている。
あの虚しい光景を。

「……………」

…また後ろ向きな事を考えた。

最早苛立ちや呆れを通り過ぎて高笑いしてしまいたい。
ウジウジと引きずってはいけない事ばかり続け、すぐに大切な事を忘れる。

僅かだが純粹なはやてと過ごして何かが変わると思っただが、もう駄目かもしれない。

俺は堕ちすぎた。

自己満足な願いの為に只無駄に生き続けている今。
はやてを幸せにしてやれる自信も無い。

消えるべきだろう、誰もいないところで今度こそ静かに…。

手に握られた1760円。

これで世話になったはやてにお礼を渡して…。

はやてside

作りかけの料理を台所に放置したまま、魂が抜けたようにテレビのチャンネルをポチポチと変えていく。

この時間帯では昼頃のニュースやドロドロとした展開が始まるドラマしかない。

なんだか自分が凄く虚しく感じた。

いつもならこんな事、当たり前前の事であった筈なのに、遊星と出会ったおかげでより一層寂しさを噛み締めるのだ。

ご飯だつてちゃんと作って、掃除は欠かさない。

なのに今は遊星のおかげで動く気が湧かない。

だいたい、昨日までは優しかった筈なのだ。

人を“その気”にさせといてあれは無い。

おまけに風呂には無理やり入れるなど、お嫁にいけなくなったらどうするつもりだ。

アンタが貰ってくれるのか。

だったら大喜びや。

だんだんと心の中が少しおかしな方向に向いていき、最早悲しみや虚しさを通り過ぎて怒りに染まっっていく。

もう、とにかく腹がたった。

余り自分の事を喋らない上に、やたら私の事を子供扱いしてからかう。

意識させようとしてもまるで効果がない。

しまいには勝手に出て行く？

どんだけ自分勝手やねん！

許さない。

とりあえず遊星の唯一の所持品であるこの銀色の板みたいな機械。これでボコボコにしたる。

それで反省させて……。

「ちゃんと話しを聞くんや！」

車椅子を飛ばしてはやては外に出て行く。

勿論、膝にはデュエルディスクを載せて。

その後ろ姿を、鎖で縛られた黒い本は優しく見つめていた。

遊星 side

「ありがとうございました！」

女性店員の爽やかな挨拶を背中受けてながら雑貨屋を出て行く遊星。その手に握られているのは可愛くラッピングされた小さな紙袋、僅かな金額で買った物は大した物では無かったが、きつと気に入ってくれると信じて懐にしまう。

それと同時に、はやての家に足が向かえば向かう程、余計な重みもこれ以上背負う必要が無くなる自覚が湧いて、悲と笑が複雑に混ざり合った表情が顔に出てくる。

だがその時。

「…ッ！」

突如街の中で破壊音と地震が響き渡る。

アスファルトやコンクリートを粉碎し、地中から異常な速さで成長する植物。

それはグングンと大きく太く、不条理に意志など全く関係ないように只大きくなる。

「遊星さん！」

横から聞き覚えがある声がかかけられ振り返ると、この事態に駆けつけたユーノとなのはがいた。

「…お前達が来るという事は、ジュエル・シードか？…あの小さな石にしては、とんでもない能力だな」

「ええ。恐らくこれはとても強い願いによる物でしょう、ジュエル・シードは強く願えば願うほど、その力を増すんです」

やはり慣れているのか、ユーノは瞬時に状況を理解し、わかりやすく説明してくれた。

だが、いくら何でも願いにしてはやりすぎである。

あの時は思念体という小さな存在だったが、これ程の力を持つとは予想以上だ。

『強い願い程強い力を発揮する石』…こんな物が全部で21個もある。落としてしまったユーノがあれば程の責任を感じていたのを今、やっとはつきり分かった。

「…お前達はどうするつもりだ？」

「とりあえず、この場から少し離れた場所で対策を考えます」

良い判断だ。

なのはという強力なサポートがあるとはいえ、この子はまだ子供、危険な目に遭わせる事だけはユーノにとって絶対にしたくないだろう。

100%安全に解決させる方法を見つけないならならぬ。例えば破壊が進んでも。

「遊星さんも一緒に来てくれますよね？」

ユーノは期待した目で此方を見るが、俺は答える事が出来なかった。できれば助けてあげたい…だが、今の俺など何の役にも立たない上に、もう本当に関わってはいけないという歯止めがかけられるのだ。

この子達は一生懸命なのにすっかりと怖じ気づいてしまった俺がいれば、前になど進めない。

此方に引きずり込んでしまう事になったら本当にどうなる。

訪れる未来に笑顔など無い。

「ダメだよ…ユーノ君」

なのは俺を呼ばなかった。

「遊星さんに迷惑はかけられない。私は頑張れるから」

「なのは…」

止めていた足を再び動かすなのは。

逃げ惑う人々とは逆の方へ進んで。

慌ててユ一ノは俺に軽くお辞儀をし、後を追う。

なんて立派な子なんだ。

自分は頑張れるからと強い意志を感じさせる思いが伝わる。

やはりあの子なら大丈夫だ、絶対にやれるんだ。

そう、思っているのに…。

何故だ？

何故、あんなに…なのは悲しそうな顔をしているんだ？
つらそうな声なんだ？

大丈夫だと思つた瞬間にあの顔と声が何度も繰り返し、頭をよぎる。
俺は、何を間違えているんだ？

「遊星、危ない！」

「…ガッ!？」

不意に襲われる圧迫感。

胸周りをギリギリと締め付けられる感覚に陥り、虚ろだった視線を

定め気づく。

あの異常に成長した植物の一部が俺を真っ二つにすると言わんばかりに、胸元を締めているのだ。

同時に俺に危険を知らせてくれた人物を探そうと周りを見ると目を見開く。

「…はやて!?!…何故此処にいる、早く逃げるんだ!」

「アホー!遊星を置いて逃げるわけないやろっ!」

「…ッ!?!」

普段大人しい筈のはやてが突然俺に怒鳴りつけた事に驚く。

「バカ!アホ!唐変木ー!」

車椅子で植物の根に近づくはやて。

勿論その口からは俺を罵倒する言葉を止めない。

「いつつも何考えているかわからへんのに、いつつも私を振り回して!」

植物の太い茎は傾斜の低い斜め、はやてはそれに乗り移り、上半身の力だけで登ろうとする。

背中にデュエルディスクを入れて。

「優しくしてくれると思ったら突き放して…!」

少しずつ前に進んでいる。

だが、もう既に腕は限界のようでもプルプルと震えが止まらない。

「なんで、なんでや…」

次第に声は小さくなり、目には涙が浮かんでいた。

「私は遊星とずっと一緒にいたいのに、なんで遊星はイヤなん？…私、もっと良い子になるから…」

「…ち、違っ」

次々と伝えられるはやての声を聞いて、俺は否定しなくなった。違っ。

お前が悪いんじゃない。

「ずっと寂しかった…石田先生や病院の人は優しくするけど、一緒にいてくれる“家族”が欲しくて欲しくて凄く寂しかったあ…！」

俺は只…お前と深く関わりすぎる事が出来ないんだ…！

「他の人は壁を作って優しくしてくれたけど、遊星は違ったんや…！一緒に暮らす事してくれた時から、壁なんか無かった。一緒にご飯を作ってくれた、一緒にお風呂に入ってくれた、一緒に朝まで家にいてくれる家族みたいなもんやったんやあ！」

「…違っんだッ！」

「え…」

「…俺は怖かった、お前と一緒にいる幸せが」

言わなければならぬ。

俺の本当の気持ち。

でなければこの子はずっと傷つき続ける。

自分が悪いのだと、何にも悪くないのに俺に捨てられる恐怖、独りきりの絶望を味わいたくないから。

「…俺はお前が思っている程、良い人間じゃない！薄情で人を簡単に殺す事が出来る奴だったんだ！だが、お前と関われば自分の汚い物で汚してしまいそうで、幸せの日々を無くしてしまいそうで怖かったんだッ！」

言った。

全部、知られたくない事も包み隠さず。

「…だから、お前のせいではない！」

全て言った瞬間、俺はある重要な事に気づいた。

俺は今まではやてやなのには悪い影響を与えろと思ひ、親しくなる事に何度も心の中で歯止めをかけていた。

この子達の為に。

…でも、そうじゃなかった！

俺が嫌われる事に恐怖しているだけだったんだ！

自分が今まで犯してきた罪をいつか知られた時、見放される事が、あの“絶望”が無意識に怖くて、只怖くて、ならいつその事突き放した方が良いと思つた！

それに気づかないで自己満足の保身の為に、はやくに辛いを思いを

させて…。俺は“本当”に逃げていた！

間違いないく嫌われる、その恐怖を今度は俺が味わう事になったがもう構うものか。

この子は昔の俺と同じ、寂しさを知っている。

そして俺も知っている。

その寂しさがどれほどの物なのか。

だから、はやてがこれ以上傷つけなければそれで良いのだ。

「そうかあ…」

はやての聲が近い。

互いの息が触れる程の距離。

汗だくで登りきったはやての声はとても優しく、安心しきっていた。

「私、遊星に嫌われたわけじゃなかったんやなあ…」

目の前にははやての笑顔。

俺は一瞬しか見れない。

顔を上げたがすぐに伏せてしまう。

「……………」

嬉しくて堪らない。

俺はもう、独りきりでは無い事を今度こそ実感出来たのだから…。

はやては背中中のデュエルディスクを取り出し、尖った先で植物に突き刺そうと何度も叩きつける。だが、もう腕の力など残っていない。太い茎に傷を付けるなど不可能な話であった。

「…もついい。止める、止めるんだはやて！」

「大丈夫、絶対に私が助けるから…！」

「…頼む！誰でも良い、この子を止めてくれ！」

俺が持ち上げられている高さはおよそにして約7メートル。

人によっては着地すれば助かる可能性が高い高さだが、両足が自由であるはやてにとってそうはいかない。

下手をすれば…。

考えると背筋が寒くなり、急いで周りに助けを求めるがこの騒ぎにすっかり街は静かになっている。

「…ぐあー！」

植物が更に締め付けようと動いた瞬間。

「あ…」

あらゆる景色がスローに変わる。

腕の力も無い、足も不自由なはやてがその突然に起こった振動に耐えられる筈もなかった。

はやてはバランスを崩し、俺は必死に手を伸ばすが代わりに掴み取れたのはデュエルディスク、はやての手には届かない。そのまま落下してしまふ。

「…はやてええええ！」

頼む、頼む！俺の命だろうが体だろうが何でも構わない！引き換えにはやてを助けられる力を…！

時械神のような絶対的な力を望んでいるじゃない。

この小さな手を掴み取る僅かな力で構わないんだ！

その力を、俺に貸してくれ！

そう願った瞬間、胸に鋭い痛みが走ったと同時に空中で塵や芥が集まりだし、1つの歯車を生み出した。

遊星ギア

モーメントを発生させる遊星粒子を生み出す唯一の力。

もう要らないと思ったその力が今、目の前に現れた。

考える時など無い。

すぐさまデュエルディスクを腕に嵌めると遊星ギアを取り付ける。流れる虹色の光。

カードなんて物は無かったというのに光が包まれた瞬間、俺が最後に使っていたデッキがそこにある。

私が忌み嫌っていた力。

私には必要ない物が、私ではもう使う事が出来ないと思っていたカードが此処にある。

大切な何かを、大切なはやてを守る為に望んだ…俺が！

俺が認めた力が！

俺は……！

「…俺はスピード・ウォリアーを召喚！」

11話 気づいた気持ち（後書き）

前に他の作者さんの活動報告で、『よく主人公が力を望む時“守る為の力”が欲しいと願うけど、守る為の力とはなんなのか？』と書いてありました。

その日からそれについてよく考えるようになり、ずっと悩んでいました。

何日も考えた末にたどり着いたのは、やはりよく言われるように『力は所詮、力でしかない』という事。

では何故、“守る為の力”が欲しいと願うのか。
これも自分の勝手な意見ですが、一種の無意識で出た『誓い』ではないのかと思います。

力は力。

問題はそれを何に使うのか。

今、ピンチに陥らせているのは力。

大切な物を破壊、大切な人を傷つける為に使えている物。

主人公は“その力”を許さない。

でも同じ力だとしても力を望んでしまう。

破壊ではない、守る為の力が欲しいのだと。

無意識に誓って。

シリアスな感じからぶっ壊しクマー！

(^^) 「初めあたりだお」

はやて「え、えつとな…ご飯、一緒に作ったらええかなあと思って
……」

(^^) 「クマｗｗｗｗ。幼女と一緒にご飯を作るなんて最高ｗｗ
w。裸エプロンギボンヌｗｗw」

遊星「…悪いが断る。朝食も必要無い」

(^^) 「ちょ！？ なんとこの事を言ってるのッ！」

はやて「でも…朝ご飯はちゃんと食べなアカンよ？」

(^^) 「そうだクマー！朝から快便になるクマー！」

遊星「…すまない」

(・^・^)(^エ)「うう…酷い。…ってアレ？　なんか無視されてない？　いない扱いしてない？」

ガチャン…。

はやて「遊星…なんでやつ」

(^エ) (^ ^) 「……………」

…瞳が潤んだ幼女が1人で寂しがっている。

これはチャンスクマー！

薄い本みたいにはやてをヌルヌルぐちよぐちよグチャグチャイヤー
ンで、ドキドキわくわく、ムフフでうひひでウへへな事が思う存分
出来るクマー！」

遊星「…おい、デュエルしろよ」

(^エ) (^ ^) 「バ、バカな…クマの思考を読んだ上に、あの距離で背
後を取っただと…！」

＼ギヤース！／

はやて「遊星…」

遊星「…はやて」

H A P P Y e n d !

12話 シンクロ召喚！（前書き）

ヤッホー、慧です。

今回の話しはタイトル通り、バトル系。

戦闘描写が難しいので、内容はこれが私の限界さつくばらんになっています。

因みにこの話しでデュエルは一切ありませんので、ご了承下さいまし。

後書きには期間限定のアンケートがあるので答えていただければ有り難い。

それでは遊星、初バトルをお楽しみ下さい。

12話 シンクロ召喚！

なのはside

目の前に映るのは破壊されていく建物や道路。

耳をつんざくのは悲痛な悲鳴。

どうして、どうしてこんなことになってしまったのだろう。

ジュエル・シードがどれだけの危険があるのかユーノ君との話しでわかるのに、どれだけ被害を及ぼすのか遊星さんの怪我で知っていたのに、私はそれをちゃんと理解していなかった。

私は、もっと頑張らなければならなかった…。

後悔と自分を責め立てたい思いが湧き上がり、涙として出てきそうになるが、グツと堪える。

泣いちゃいけない。

今は一秒でも早くジュエル・シードを封印してみんなを助けないといけないから…。

遊星side

タイムリミットは一秒も無い。

その僅かな時間にはやてを助けられる可能性は低いと、普通なら思うだろう。

だが今、召喚されたモンスターは俺の中でも信用出来る一体。

余計な指示を与えなくても俺の思いを読み取り、植物の幹に脚をかけるとバネを利用するように下へ飛ぶ。

一瞬にして落下するはやての下に潜り込み、アスファルトの床に激突する前に滑り込むよう、スピード・ウォリアーは抱き止めた。

唇から大きく安堵の息が出る。

はやては突然の事に驚いたようで、暫しスピード・ウォリアーと俺を交互に見つめ、状況を理解するとスピード・ウォリアーに向かって優しくお礼を言った。スピード・ウォリアーは大きく頷くとはやてを車椅子まで運び、今度は植物に捕まったままである俺を助ける為に跳躍する。

空中で右足が光り輝き、コンクリートさえも粉碎出来るその力を一気に開放。

引きちぎるにも似た破裂音が街に響き渡り、植物から放たれた俺は空中に投げ出される。

だがスピード・ウォリアーはその事も予測した為、俺は街の歩道に植えられている宇津木に着地した。

葉や枝がクッションになっている上、受け身も取ったので怪我は一切無い。

はやてに続いて安堵したものの、再び植物が、異常に活発な動きを始めた。

幹が破壊され鋭くなったその先端が、今度は俺を刺し殺すつもりで迫り来る。

「遊星危ない！」

「…チツ！」

さっきは意表を付かれたから捕まってしまったが、今度はそう上手くいかない。

全て完全に見切り避けきる。

しかし、植物が暴れる度にアスファルトが破壊され激しい地響きが何度も起こる。

「きゃ…！」

粉塵が舞い、小さな破片がはやてを襲う。

このまま危ない、植物を引きつける為にこの場を離れなければ…！
だが、はやて一人を置いて置くのも危険だ。
ここは……。

すぐさまデッキからカードを5枚引き抜き、1枚のモンスターカードをセット。

『…』

「ほえ…？」

はやての目の前から元気良くピンク色のヒヨコ、ロード・ランナーが現れ、その小さなで一生懸命に盾となる。

よし、これで大丈夫だ。
なるべく此処から遠くに離れる為、全速力で駆ける。
走りながら首だけを後ろに向けると……やはり追ってきた。

一体どういう事だ…。

植物は何故俺を狙う？

何か力を狙っているのか？

いや、それだと何の力を持っていなかった先ほどの俺を襲った意味がわからない。

今は情報が少ない、この状況をすぐに乗切り、ユーノとなのはと聞いてみなければ……。

「…………ツ!?」

走っている最中に突然、前方の地面から植物が生え、立ちほだから。その動きは激しさを増し反撃を与えるチャンスが無い。更に懸命にかわすも、少しずつツラくなってきた。いずれ俺の体力が保たず、ギリ貧になるだろう。

だが…!

『ウオオオオオオ!!』

来たか、スピード・ウォリアー!

俺の後ろから雄叫びを上げながら人一人いない道を駆け抜け、加速を載せた渾身の蹴手繰りを叩き込む。

植物は大きなしなりをしながら遙か彼方に吹き飛び、今度こそヤッタかと思っただが、またすぐに起き上がった。

「…これでも駄目か！」

ならば今度は彼奴を召喚して一気にバラバラに……。

「…グウ！？」

いきなり胸を鋭い痛みが襲い、額から油汗が滲み出してくる。

手で抑え、肩で息をするが、あまりの激痛にゼエゼエとした細かく渴いた呼吸しか出来ない。

思わず膝を付いてしまい、霞む視界で頭を上げた瞬間まさにその時、再び植物が俺を刺し殺そうとボロボロの幹で襲いかかる。

突然の絶体絶命の状況に急いで避けようとしたが……。

体が上手く動かない……！

思わず目を背け、やがてくる攻撃にその身で受けようと覚悟を決めた。

「……………」

しかし、いくら待っても攻撃は俺の下にやって来ない。恐る恐る目を開け、前を見た瞬間、驚いた。

『グオ……！』

「…スピード・ウォリアー！？」

俺を守る為にスピード・ウォリアーが全身を使って攻撃を受け止めていた。

その背中からは鋭い枝が突き抜けており、先端は俺のギリギリまで迫っていたが、ちゃんと止められている。

「…済まない、俺のせいで…！」

自分の不甲斐なさのせいで大切なモンスターが傷ついた事に腹立たしさが湧き、悔しさにも似た謝罪が口から出る。

スピード・ウォリアーは痛みで震える体で頭を横に振り、気にするなど意思を伝えてくるのがわかった。

だから、今だ。

今の内に彼奴を召喚するんだ！……と。

そうだったな、ありがとうスピード・ウォリアー。

俺はいちいち立ち止まってはいけないんだ。

お前の命がけの想いを、俺は絶対に無駄にはしない！

「…チューナーモンスター！ジャンク・シンクロンを召喚！」

呼び出されたモンスター、ジャンク・シンクロン。

今のスピード・ウォリアーに新たな力を与える、共に長き苦勞を分かち合った大切な仲間。

今こそ蘇らせる時、この力！

「…スピード・ウォリアーに、ジャンク・シンクロンをチューニング！」

掛け声と同時に自分自身にエンジンをかけるジャンク・シンクロン。バイク音が轟き、その姿を三つの星に変化させると、スピード・ウオリアーを包み込む！

集いし星が新たな力を呼び起こす。

光差す道となれ！

シンクロ召喚！

いでよ、ジャンク・ウオリアー！！！！

一筋の光が空間を貫き、弾ける。

大地を力強く踏みしめて現れたモンスターは、ジャンク・シンクロンでも弱っていたスピード・ウオリアーでもない。

これがコイツ達の本当の姿。

ジャンク・ウオリアー！

深い青のボディ、鋼鉄のメリケンサックが握られたその右腕には力強いアーマーが装着されており、首からは真つ白マフラーがたなびく。

ジャンク・ウオリアーは右足と右腕を同時に引き、体制を低くした。植物は再び動き出し、襲い来るが……もう無駄だ。

踏みしめていたアスファルトを砕きながら一瞬にしてジャンク・ウオリアーは飛び上がり、背中のジェットから火を吹く。

今度の攻撃はさっきのとは比が違うぞ。

全身を巨大な拳として放つ、ジャンク・ウォリアーの必殺技！

叩き込め！！

「スクラップ・フィストオオオ！！！」

突き出される右腕。

大気を震わしたその攻撃は、最早吹き飛ばレベルでは無い。

植物は爆発したようにバラバラになり、遂にその異常に発達した幹を大人しくさせた。

「…やったな」

ジャンク・ウォリアーに近づき肩に手をかけながら話しかけると、無言ではつきりと頷く。

植物を改めて見ると、少しずつその姿を萎ませ、地面の中に潜っていくのが見えた。

どうやらなのは達の方でジュエル・シードの封印が完了したらしい。

しかし今回は街にかなりの被害を及ぼした。

恐らく怪我人も出ただろう。

なのは達が無事であれば良いが…。

一瞬不安が過ぎるが、やはり此処は考えるよりも一に行動した方が良い。

はやてはロード・ランナーがいるため安全だ。

だから自分の心のままに、なのはが心配だから早く駆けつけなければ。

再び走り出す俺の足。

始めは軽やかだったが、次第に重苦しくなっていた。

なのはあの顔が、悲しみに染まった顔が不意に浮かんで嫌な予感がしたのだ。

まるでそれは、俺が気づけなかった事があと少しでわかりかけているようにも似た。

「…ツウ!？」

なのはside

「ユーノ君、私…もっと頑張る」

「なのは…?」

ビルの屋上から夕陽に染まる街を眺めながら、少女は小さな声で呟く。

それは隣に居たユーノにさえ届かない小さな声。

けどなのはにとって其れは、大きくて辛い決意だった。

もっと、もっと、もっと頑張らないと、その言葉を心の奥底で何度も何度も繰り返し決意し、何度も何度も繰り返し後悔が襲う。

小さな体では受けきれない苦しみが溢れ出そうになるが、またしても堪える。

いや、堪えなければならぬのだ。

自分のせいどころだったのだ、泣いて言い訳がましい事してはいけないんだ。

「ユーノ君」

「何？」

「遊星さんが無事か、探すついでに確認してほしいの」

「なのはは行かないの？」

「私は眺めが良い此処から探すね」

「うん、わかった。何かあったらすぐに呼んで」

私は頷いただけで返事をする。

ユーノ君はピョンピョンと跳ねながら階段に向かい、やがて外に出るのを私は上から確認すると、力が抜けたようにお尻を着いた。

もう、我慢が出来なかった。

「うわぁぁん！」

苦しい、苦しいよ。

こんな思いしたくないなら、もっと頑張らなければいけないのに、私は甘えてしまった。

今、みんなを助けられるのは、私しかないのに……！

ビルの屋上で少女の泣き声が響く。

一人ぼっちで苦しみに押し潰されそうになりながら、後悔する自分に罰を与えるように、一人ぼっちで泣き叫ぶ。

それを知っているのは胸元に揺れる、レイジングハートだけ……ではなかった。

「…何をやっている…!」

「っ!？」

突然後ろから誰かに強く抱きしめられ、しゃっくりを起こしたように思わず泣き声が止まる。耳元で囁くように叱るこの声に、なのはは覚えがあった。

「遊、星さん…どう、して?」

どうして此処にいるの?

この広い街で私をどうやって見つけ出したの?

その疑問がなのはの中で浮かんだ。

遊星は更に強く抱きしめ、顔が見えないようになのはの背中にうずめる。

「…なんでだろうな」

嘘を言っているようではなかった。

でも、本当に偶然鉢合わせしていたにしては出来すぎている。

まるで、私たちは出逢うべくして出会ったように。

「…なのは、一人で苦しまないで誰かのそばで泣いて良いんだ。」

「でも、私の…せいで!」

「…お前は、優しいな」

「違う、違うの…!」

私は優しいんじゃない。

本当に自分が許せないから苦しめているんだ。

その思いに誰かを思いやる気持ちなんて物は無く、ただ、罪の意識を少しでも軽くしたい自分の自己満足だけなんだ。

泣き声で言葉は出てこなかったけれど、遊星はその思いを痛い程理解した。

「…今、やっとわかった」

なのはは無理やり泣き声を止め、遊星の言葉に耳をすませる。

「…お前はずっと、俺に助けを求めていたんだ。お前のあの、俺に出会った嬉しそうな顔、別れる時の悲しい顔、助けてくれた時の力強い顔…その全てが俺を求めていたんだな」

突然、内に秘めていた思いを言い当てられ、泣きとは違う意味で顔が熱くなり、胸が高鳴った。

「…俺はもう逃げない。お前達と共に力を合わせて、みんな守る…
“誰も苦しめない為に”」

「“そこ”には、私も含まれているの？」

「…当たり前だ!どんな所でもお前に危機が訪れる事があるなら、俺はすぐに駆け付ける!」

嬉しい。

遊星さんは私だけを見ているわけじゃないけど、それでも凄く嬉し

かった。

もう、私は1人じゃない、頼れる人達がいる。

この強い繋がり、そう……あれだ。

「ありがとう。私、大切にするね、遊星さんとの繋がり……“絆”を！」

少女の顔にはもう、悲しみはない。

遊星は一瞬、驚いた顔をするが、すぐに嬉しそうな表情をすると大きく頷いた。

「……ああ！」

これから私達は繋がっていく。

大切な何かを守る為に、苦しみを分かち合い、力を合わせ、いつぱい進んでいくのだ。

遊星 side

ユーノと共にビルから去っていく、なのはを屋上から見送った俺は、すぐに倒れこんだ。

「……おえ！」

情けない嗚咽が腹から喉にせり上がり、胃の中の物がビチャビチャ

と床にぶちまけられる。
鼻にくる悪臭が漂うが、俺にはそんな物を気にする余裕が無い。

植物を倒した後なのはを探そうとしたあの時、俺を襲ったのは再びあの胸の激痛。

ジャンク・ウォリアーはすぐに心配をして近づいたが、その瞬間に姿がかき消えてしまい、俺を懐抱する事は出来なかった。

いや、そんな事よりも問題は、ジャンク・ウォリアーが消えてしまった原因だ。

原因はすぐにわかった。

遊星ギアである。

つい先ほどまでデュエルディスクを起動させていた遊星ギアが、突然外れしまい、ボロボロと元の塵になってしまったのだ。

やはり即席で無理やり作られた物だからダメだったのだろう。
今度からまた、新しい遊星ギアを作り上げなければならない。

そんな事を考えながら俺は胸を押さえながら無作為に歩いていたが、不意に建物の中へ吸い込まれるように入ってしまう。

ゆっくりゆっくりと階段を上がっていき、屋上の扉を開けてそこで見たのは、一人ぼっちでわんわんと泣いているのはだった。

その瞬間、俺の中でずっと引っかかっていた事がやっただわかった。
なのは見て、何故悲しい気持ちになったのか、何故……不安を覚えたのか。

それはこの子が、どことなく俺に似ている気がしたからからだ。

姿も、性別も、ひねくれた俺と違うまっすぐな性格な、なのはと似

ていない筈なのに、ひとりぼっちで泣いている姿は……あの私に全く、未恐ろしい程似ている。
行き場の無い悔しさが胸の中に溜まり、後悔の涙と懺悔の叫びしか溢れこない。

自分ももっと頑張れた筈なのに、もっと頑張らなければならなかったのに……！
手遅れになってしまったッ！

だから、ひとりぼっちで泣いた。
涙が枯れる程、心が冷める程。

冷めた心は優しい温もりを求める。
なのはは求めていたんだ、俺を。

例え力が無い、頼りない人間だろうと真に支えてくれる人なら構わないのだ。

俺がそうであったように。

なのに俺は、それに気付けなかった。

本当に俺は。

「…何をやっている……！」

気づけばなのは後ろから抱きしめていた。

「遊、星さん…どう、して？」

「…なんでだろうな」

この言葉に嘘偽りは無い。

本当に何故だろうと、それは遊星自身が知りたい疑問だった。

「…なのは、1人で苦しまないで誰かのそばで泣いて良いんだ。」
あとになって気づく、誰かに自分の弱さを見せる事、犯した過ちを誰かに教えてやる事で気持ちを軽くする大切さを溜め込んだしまう事はとてもツライ。

「でも、私の…せいで！」

「…お前は、優しいな」

例え誰かに教えても、今度はその人を苦しめる事になる恐れがあるかもしれない。

だが、その人が本当にお前の事を想ってくれる人なら、逆に悲しい思いをする。

何故、私を頼ってくれないの…と。

私はこんなにあなたを心配しているのに。

「違う、違うの…！」

違う？

ならお前は本当は誰かに支えてもらいたいのに只、自分を苦しめる為にひとりぼっちで泣いているというのか？

それじゃお前は…。

「…今、やっとわかった」

俺とまるで同じじゃないか。

「…お前はずっと、俺に助けを求めていたんだ。お前のあの、俺に出会った嬉しそうな顔、別れる時の悲しい顔、助けてくれた時の力強い顔…その全てが俺を求めていたんだな」

はやてやお前と出会った俺もそうだったんだ。

お前達を求めていた。

でも、自分は関わっていけない…苦しめていけない、だが自分自身を苦しめる。

その思いで常にいっぱいだった。

だがな、それでは前に進めないぞ。

あの子に教えてもらった、もっと自分自身を大切にすること、建て前なんて気にしないで素直に生きる事。

だから。

「…俺はもう逃げない。お前達と共に力を合わせて、みんな守る…」

“誰も苦しめない為に”

「“そこ”には、私も含まれているの？」

「…当たり前だ！どんな所でもお前に危機が訪れる事があるなら、俺はすぐに駆け付ける！」

迷わない、後ろを見ない、前を見続けてお前達の為に走り続けてやる！

「ありがとう。私、大切にされるね、遊星さんとの繋がりが…“絆”を！」

自分が大好きだった言葉を聞いた時、胸の中から今までとは違う気持ちは湧き上がってきた。

“絆”

なんて心地よい物なんだ。

目には見えなくても、確かに人と人をつなぎ合わせている物。

ひとつひとつは小さな力でも、大きな力に変えてくれる物。

俺自身を表していた物。

もしかしたら、俺が此処に来れたのも絆のおかげかもしれないな、
なのは。

「…ああ！」

ふと気づけば、もう夕日は沈みかかっていた。
早くはやてを迎えにいかねばならないかと、自分が思わず笑顔になっ
ているのにわかっ
ていながら立ち上がる。

そして俺は…意識を失い、倒れた。

12話 シンクロ召喚！（後書き）

まず、溜まっている感想は必ず返信するので、少々お待ち下さい。

今回の話して一番大切にした事は、スピード・ウォリアーらしさを出す事でした。

スピード・ウォリアーといえばみんな大好き漢な所がありますよね。切り札に繋いだり、盾になったり盾になったり盾になったり盾になったり。

遊星に関しては前半、明るくしすぎた気もする…。
なんか違和感があるな。

なのは主人公である為か、遊星と似ている所がありますよね。
なんというか、しつかりしすぎている感じ？
だからこそ後半は凄く書きやすかった。

そして遊星ギアを再び失った遊星。

力はただ、手に入れば良いってものじゃない。
簡単に手に入ればそれだけの安っぽさや条件が必要であり、強い力を手に入れるには時に、代償や覚悟、本気さが不可欠なのです。
この話しは力に関しても語っていきます。

…え？

今回まじめすぎるって？

安心しな、次は飛ばしてやるぜ！

P S、アンケートです。

手短かに言うと、タグを新しく追加したものの他に良い案がなく、しかも少ないので、ピックアップみたいに読者の皆さんで考えてもらいたいです。

去年のクリスマスアンケートみたいな感じでやりたかったけど、色々問題があったので、今回はタグだけとなりましたが……よろしくお願ひします。

期限は12月29日午前4時まで。

シリアスからお笑い、意味深、クマ吉などなんでもOK！
アンケートの答えは感想まで！

答えの中からコレは！という物を一つ選び、追加いたします！

では皆さん、さよーならー！。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5623r/>

魔法少女リリカルなのは 蘇った英雄

2011年12月25日02時48分発行